高等学校

平 成 13 年 度

# 教育研究員研究報告書

## 地理歴史・公民

東京都教職員研修センター

# 教育研究員名簿

| 分科会 | | 所属 | 氏名 |
|---|---|---|---|
| 地理歴史 | 世界史グループ | 都立井草高等学校 | 川副　聡 |
| | | 都立墨田川高等学校 | 増田　正弘 |
| | | 都立野津田高等学校 | 清水　一郎 |
| | 日本史グループ | 都立玉川高等学校 | 安田　正和 |
| | | 都立武蔵村山高等学校 | 伊藤　哲朗 |
| | | 都立小平西高等学校 | 田中　暁龍 |
| | 地理グループ | 都立足立新田高等学校 | 奥澤　誠一 |
| | | 都立足立工業高等学校 | 今井　啓介 |
| | | 都立第三商業高等学校 | 池澤　淳子 |
| | | 都立小金井北高等学校 | 安西　弘幸 |
| 公民 | | 都立城南高等学校 | 山田　豊和 |
| | | 都立大森東高等学校 | 小澤　清司 |
| | | 都立江戸川高等学校 | 盛　健二 |
| | | 都立東大和高等学校 | 沖山　栄一 |

担当

東京都教職員研修センター指導主事　上村　肇

# 目　　次

## 地理歴史分科会


Ⅰ　研究主題設定の理由 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

Ⅱ　研究の経過 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

Ⅲ　展開 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

＜世界史グループ＞

1　研究内容と方法 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

2　授業研究 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

3　指導案 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

4　分析と考察 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12

＜日本史グループ＞

1　研究内容と方法 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15

2　指導計画 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15

3　授業研究 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16

＜地理グループ＞

1　地理の授業で環境問題を取り上げる視点 ・・・・・・・・・・・・・・26

2　熱帯林破壊を取り上げた理由 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27

3　授業研究 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28


## 公民分科会


Ⅰ　主題設定の理由と研究の経過 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37

Ⅱ　展開 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39

展開1　倫理の授業「脳死と臓器移植」 ・・・・・・・・・・・・・・・・・39

展開2　現代社会の授業「医療技術の進歩と生命倫理」 ・・・・・・・・・43

Ⅲ　まとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・47

【地理歴史分科会】

**研究主題**

基礎・基本の習得を通して問題意識を深め、自ら課題を追究し、解決・行動できる資質を育成する授業展開の工夫

## Ⅰ　研究主題設定の理由

今日、わたしたちは、マスメディアやインターネットの発達などにより多種多様な情報を、大量に、そして瞬時に取り出すことが可能になった。しかし、その一方で、誤った情報に基づいて価値観を形成したり、氾濫する情報から混乱を生じ、事実を見誤ってしまったりするおそれも生じている。

こうした問題は、実際の生徒の様子にもみられる。マスコミから聞きかじった断片的な情報によって誤った認識のまま物事を分かったつもりになっている生徒や、「博識」ではあるが、問題の原因や深刻さ、それらが自分の生活にどのように関わっているかを考察するまでには及ばない生徒がいるなど、情報を持て余したり、情報に振り回されたりといった現実が生徒たちのなかにも存在する。

このような事態を打開するためには、膨大な情報のなかから適切に物事を判断したり、多様な事象の関連性や問題点について、自ら考え、解決していこうとする力を生徒に育成する必要があろう。

授業において、まず重視したいのは、生徒が基礎的・基本的な知識を正確に習得することである。諸事象を成り立たせる根本的な知識を理解することなしに、学習を深めることは不可能であるからである。同時に、誤った固定観念をもつ生徒に対し、正しい知識や認識を教えたり、発見させたりすることを通して、問題意識を深めさせることも重要である。

また、文献資料・統計・地図などを用いた作業的・体験的な学習を通じて、公正な判断力や諸事象を考察する基本的な視点や方法を身に付けさせ、学習成果を発表させることなどを通して生徒の主体性を伸ばし、多様な課題を自ら追究し、解決しようとする自覚や資質を養う指導も必要であると考える。

こうした観点から、本分科会では、基礎・基本の習得を土台に、生徒が主体的に課題を追究し、問題を解決していく資質を育成する授業づくりをテーマとして、「地理」と「歴史」、それぞれの立場で研究に取り組んだ。

## Ⅱ　研究の経過

### （1）歴史分野＜世界史グループ・日本史グループ＞

主体的な学習による問題解決能力の育成には、まずていねいな基礎・基本の学習を行い、生徒のもつ断片的な知識や情報を整理・補完することが必要である。そして、これによって得られた正確な知識をもとに、生徒が自ら多面的に課題を追究し、問題を解決していく力を養う、という授業展開が適切と思われる。さらに、「教員誰もが実践できる授業展開の工夫」を試みた。

世界史グループは、「中華的世界の崩壊」を主題に、3 時間構成の指導計画を設定し、展

開例は「アヘン戦争」を取り上げた。その理由はアヘン戦争は中学校で学習済みであるが、その原因を深く探ることでグローバルかつ複合的（多角的）な視点をもつことができることである。

共通のワークシートを作成し、今回の研究員がそれぞれの高校で、以下の手順で授業展開することとした。

・　第１時限目に基礎的な知識を習得させながら、生徒に対して「なぜ？」「なぜ？」といくつかの問いかけ（設問）をする。
・　設問に対して出された意見をもとに、第２時限目までに生徒自らが宿題（課題）について考え、答えを追究してくるように指示する。
・　第２時限目に、生徒が導き出した解答を発表させ、発表内容について、教員が批評・補足する。

日本史グループは、「文治政治の展開」を主題に、「元禄・正徳期の貨幣改鋳」を取り上げ、3時間構成の指導計画を設定した。3代将軍徳川家光から4代将軍家綱への政権交代は、一般的に、武断政治から文治政治への転換期として位置づけられている。元禄期は、都市の発達にともなって町人たちの経済活動がさかんになり、新興商人が台頭してくるなど、時代の大きな転換点としても着目されている。また、元禄期の幕府財政は、鉱山収入の激減と支出増加によってその悪化が深刻な問題となっていた。このため、江戸幕府は元禄・正徳期にいずれも貨幣改鋳を行い、経済の建て直しを図るが、かえって経済の混乱を深めることになった。こうした時期の経済を扱うことは、今後の学習活動において有効であると考えられる。そこで特に「元禄・正徳期の貨幣改鋳」に焦点を当て、幕府の経済政策の転換点としての意味について、生徒の理解を深めさせ、またワークシートを工夫することによって、生徒が主体的に学習できるよう配慮した。

**（２）地理分野＜地理グループ＞**

世界各地に生起している地球的課題には、地域・国境を越えて取り組むべき問題が数多く存在する。国際社会に主体的に生きる日本人としての自覚と資質を養う上で、現代世界が取り組む諸課題を生徒一人一人が自らの課題として学習することは、非常に重要である。

特に、「環境問題」は、マスコミでもたびたび取り上げられており、生徒にとって身近な問題であると同時に、早急な解決が求められる問題であるといえる。また、諸地域の地域性や国際社会の結びつきを多面的に学習するために有効であり、別項で述べるように、研究主題のねらいにも合致するという判断から、本グループは「環境問題」を題材に研究に取り組むこととした。

今回の授業研究では、さまざまな環境問題を細切れの知識やエピソードとして扱うのではなく、取り上げる地域をある程度絞ることにした。そうすることで、「環境問題」を切り口に、問題の背景にある「南北問題」や「大量消費社会」の在り方などにも学習を広げ、広い視野から地理的認識を深め、基礎・基本を習得し、地理的な見方・考え方を身に付けさせたいと考えた。また、生徒の興味・関心をひく実物教材や視聴覚教材、ワークシートを導入するとともに、問題の解決について生徒が考察したり発表したりする機会を設定するなど、授業展開に多様な工夫を試みた。

## Ⅲ　展開

### ＜世界史グループ＞

中華的世界の崩壊

### 1　研究内容と方法

本グループでは、「中華的世界の崩壊」をテーマに、３時間の単元学習を設定した。第１時限では、「アヘン戦争」を扱い、伝統的な中華世界に“西洋の圧迫”がどのような形で迫ってきたかを考察させる。第２時限では、「太平天国とアロー戦争」を扱い、アヘン戦争後の中国社会の混乱を理解させ、中国における近代化運動の必要性について考察させる。第３時限では、「洋務運動と日清戦争」を扱い、中国の近代化運動の性格と限界を理解させるとともに、日清戦争の敗北による中国を中心とした伝統的な東アジアの国際体制の崩壊を考察させる。全３時間の学習を通し、生徒に「基礎･基本の習得」を徹底させるとともに、課題の考察･学習成果の発表を行うことで、生徒が主体的に参加する授業づくりをめざした。さらに、本グループでは、３人の授業者が共通のワークシートを使用し、それぞれの学校で実施した授業の成果を持ち寄り、比較･検討する方法をとったが、本報告書には第１時及びその発表を行う第２時についての指導案を掲載した。なお、本グループの単元学習は、新学習指導要領の「世界史Ａ」の「(２)一体化する世界」の「エ　アジア諸国の変貌と日本」、または「世界史Ｂ」の「(４) 諸地域世界の結合と変容」の「エ　世界市場の形成とアジア諸国」に位置づけて実施する。

### 2　授業研究

（１）指導計画

| | 学習項目 | 具体的な学習内容・学習活動 | 留意点 |
|---|---|---|---|
| 第１時 | アヘン戦争 | ・18 世紀後半までのイギリスと中国との貿易構造について考察する。<br>・18 世紀後半以降のイギリス･インド･中国の三角貿易について考察する。<br>・アヘン流入に対する中国側の対応について考察する。 | イギリス側の一方的な赤字であった対中国貿易を、イギリスはどのように転換していったのか、産業革命との関連の中で考察させる。 |
| 第２時 | 太平天国とアロー戦争 | ・南京条約の内容を確認し、その影響を考察する。<br>・太平天国運動の経緯と運動の民族主義的な性格を考察する。<br>・アロー戦争の経緯と北京条約の内容を確認する。 | 太平天国運動のさなかに、アロー戦争が勃発したことを確認させ、1850年代後半の中国社会の状況を理解させる。 |
| 第３時 | 洋務運動と日清戦争 | ・日本の明治維新との比較を通して、洋務運動の性格を考察する。<br>・朝鮮半島をめぐる日本と中国との対立の経緯を確認する。<br>・下関条約の内容を確認し、東アジアにおける中国の立場の変化を考察する。 | 明治維新と洋務運動のちがいを明確にし、日清戦争の敗北が洋務運動の限界を露呈したことを理解させ、今後の学習につなげる。 |

## 3　指導案

第１時　アヘン戦争

（１）本時のねらい

本時は、次時の発表授業の前段階として、アヘン戦争の基礎・基本をしっかりと学ぶこととしたい。アヘン戦争については中学において学習をしているので、ある程度の知識が生徒にもあると考えられる。今回は、アヘン戦争の原因に時間をかけて授業展開することで、世界史的な広がりの中でアヘン戦争を捉えられるようにしていく。

また、設問を設けることで、資料から何を読みとっていったらよいのか、ポイントを明確にし、生徒が主体的に考えるヒントとしたい。

アヘン戦争の結果（南京条約），清が敗北した理由，日本への影響については、次時の授業までに生徒が調べ、発表することとする。

以上を通して、今回の研究主題である、主体的に自ら課題を追求し、解決し、行動できる資質を育成する。

（２）本時の展開（ワークシートは８～１１ページに掲載）

| | 学習項目 | 学習活動 | 指導上の留意点 |
|---|---|---|---|
| 導入 | ○イギリスと中国との関係について | ○設問１『なぜイギリスは中国から大量の紅茶を輸入していたのか。』イギリスの産業革命時の労働者について復習するなかで、労働者の飲料となったこと、健康な労働者を手に入れたい資本家の利益にもかなうものであったことを確認する。 | ○もの教材として紅茶を提示し、本時の授業への興味を持たせる。 |
| 展開 | ○イギリスと中国の貿易構造 | ○設問２『18 世紀後半までの貿易構造の特徴について片貿易の図の（　　）に適語を入れなさい。』その際、以下のことについて確認する。<br>①イギリスは茶を輸入するために支払いを銀で行っていたこと。<br>②イギリスは銀ではなく綿織物を中国に輸出するという貿易関係をもちたかったこと。<br>○設問３『設問２の貿易構造を転換するためにイギリスはどうしたらよいか』<br>○設問４『実際の貿易構造は次のように変化した。（　　）に適語を入れなさい。』<br>①インド産アヘンを中国に密輸することで、三角貿易体制を築き、対中国貿易赤字（イギリスからの銀流出）をくいとめる。<br>②公行を廃止させ、中国が門戸を開放し、イ | ○18 世紀後半から19 世紀半ばまでのイギリスと中国の貿易を示す資料として『乾隆帝のジョージ３世に宛てた手紙』を提示する。<br>○三角貿易の図の（　　）に適語を入れながら、①を考えさせる。<br>②については適度に助言を与える。 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| | | ギリス製品をもっと輸入させる状況をつくる、などの解答を導き出す。 | |
| | ○アヘン流入によって引き起こされる中国の問題 | ○設問５『アヘンの流入によって中国の社会・経済はどのように変わっていったか』<br>①社会への影響はアヘン窟の絵を見ながら考える。 | ○アヘン窟の絵画、アヘンの害悪の資料を提示する。 |
| | | ②銀の流出が中国の民衆を苦しめることになった理由を考える。<br>①、②の学習を進めながら、あわせて設問６のグラフを作成する。 | ○地丁銀という税制について説明する。 |
| | ○アヘン対策 | ○設問７『あなたが、清の皇帝であったらどのように対応するか。』資料を見ながら、対応策について、考察し、発表する。 | ○林則徐の通達の資料と「厳禁政策修正の上奏」の両方を提示し、歴史的事実として、アヘン厳禁論者の林則徐が登用されたことを説明する。 |
| | ○アヘン戦争 | ○設問８『その際、イギリスはアヘンを理由に戦争を起こすことをどのように考えたと思いますか』当時のイギリスの開戦手続きを説明し、下院での審議の結果わずか９票差で開戦決議がなされたことを説明する。 | ○グラッドストンの演説の資料を提示する。<br>○アヘン戦争の経過を説明する。 |
| ま<br>と<br>め | 調べ学習 | 以下の３点について調べ、次回の授業で発表することを伝える。 | |
| | ○南京条約 | ○南京条約・虎門寨追加条約の内容について調べる。 | |
| | ○清朝の敗北の原因 | ○どのような点が問題で清朝は負けたのか。敗戦後、どのようなことを改善しなければならないのか。 | ○問題点・解決策について列挙し、記入してくることを確認する。 |
| | ○アヘン戦争の日本への影響 | ○『日本はアヘン戦争についてどのように情報を得ていたか』『江戸幕府は対外政策を変更したか』アヘン戦争が日本に与えた影響について考察することで、身近な問題として考える。 | ○日本史の問題としては、どのように考えることができるか、考えさせる。 |

（3）評価の観点

・ワークシートをしっかり記入しているか。

・資料からしっかりと解答を導き出すことができたか。

第2時　アロー戦争と太平天国

（1）本時のねらい

前時の授業をうけて、発表授業をおこなう。さらに、これを導入とし、『アロー戦争と太平天国』について基礎・基本的な事項を学ぶ。

（2）本時の展開

| | 学習項目 | 学習活動 | 指導上の留意点 |
|---|---|---|---|
| 導入 | ○前時の復習 | ○アヘン戦争の結果、清が敗れて南京条約が締結されたことを確認する。 | |
| 展開 | ○発表授業 | ○前回提示した宿題を発表する。 | ○発表予定者、グループのリサーチペーパーを提出させる。<br>○発表予定者のリサーチペーパーを印刷しておく。<br>○疑問点につなげられるようポイントを押さえつつ、簡潔に説明する。 |
| | ○太平天国について | ○説明を聞きながらワークシートに記入する。 | ○本日のワークシートを配布<br>○発表をうけて、授業につなげていく。 |
| | ○アロー戦争について | ○説明を聞きながらワークシートに記入する。 | ○太平天国の時に列強は何をしていたのか、考えさせる。<br>列強はアロー戦争による勝利の後、対清朝について、対太平天国に対して、どのような対応をするか、それぞれ考えさせる。 |
| まとめ | ○太平天国・アロー戦争の影響 | ○列強はアロー戦争後、どのような内容の条約を結んだか、その内容を確認する。 | ○第3時の授業につなげていくために列強と清朝の立場を整理して説明する。 |

（3）評価の観点

・リサーチペーパーを作成，提出したか。

・発表をわかりやすく行うことができたか。

・本時のワークシートをしっかり記入しているか。

＜世界史ワークシート＞

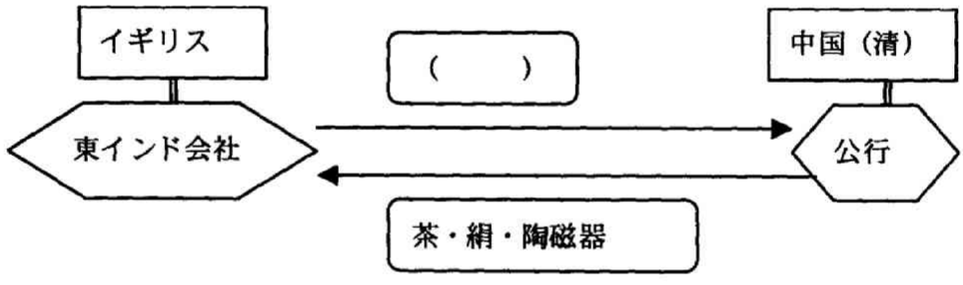
# アヘン戦争

年　組　番 氏名

## Ⅰ アヘン戦争の背景

設問１　『なぜイギリスは中国から大量の紅茶を輸入していたのか。』

設問２　『下記の図を見て、18 世紀後半までの貿易構造の特徴について、（　　）に入る物産を入れなさい。＜資料１＞を参考にすること。』



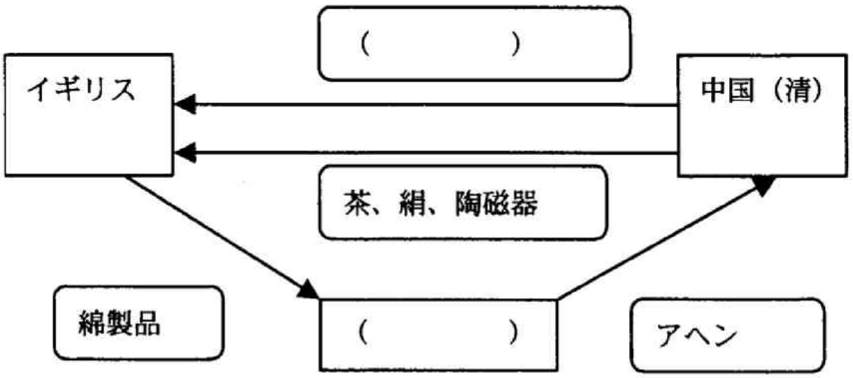

＜資料１＞ 乾隆帝のイギリス国王に対する勅諭　1793 年 9 月 23 日

天朝の物産は豊かで無いものはなく、もともと外国産のものに頼って有無を通ずる必要はない。ただ天朝に産する茶，磁器，生糸は西洋各国および汝の国の必需品であるから、恩恤を加え、マカオに洋行を開設して日用品を資助し、天朝の余沢にうるおうことを認めているのである。にもかかわらず今、汝の国の使節（ジョージ・マカートニー）が定例に反することを色々と陳情するのでは、恩恵を遠人に加えて、四夷を撫育するという天朝の意に対して無理解も甚だしいといわなければならない。

『大清高宗実録』巻１４３７

設問３　『上記の貿易構造はイギリスにとって好ましいものではなかった。イギリスはこの貿易構造を転換するためにはどうしたらよいでしょうか。その際、上記＜資料１＞の波線や設問２の図にあった『公行』についても注目し、答えること。』

設問４　『実際の貿易構造は次のように変化した。（　　）に適語を入れなさい。』



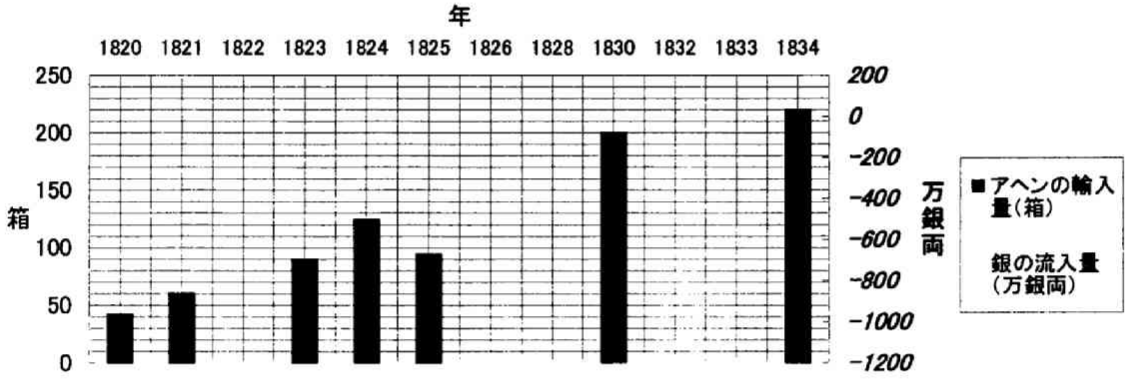

設問５　『アヘンの流入によって中国の社会・経済はどのように変わると思いますか』

設問６　『次の表を使って、清朝への銀の流入量を折れ線グラフの形で書き加えなさい。』

１００箱＝６０００ｋｇ

| 年 | 銀の流入量（万銀両） | アヘンの輸入量（箱） |
|---|---|---|
| 1820 | 15 | 42 |
| 1821 | | 60 |
| 1822 | -250 | |
| 1823 | | 90 |
| 1824 | -53 | 124 |
| 1825 | | 94 |
| 1826 | -356 | |
| 1828 | -486 | |
| 1830 | -504 | 200 |
| 1832 | -375 | |
| 1833 | -964 | |
| 1834 | | 220 |

清朝の銀の流入量とアヘンの輸入量



設問７　『あなたが、清の皇帝であったら、どのように対応しますか。＜資料３，４＞を参考にしなさい。』

＜資料３＞ 許乃済「アヘン厳禁政策の修正に関する上奏」1836 年 6 月 10 日

結局のところアヘンの吸飲者は怠惰で志もない、問題にならない連中であり、また老齢になって嗜む者もあるが、それが人の寿命を縮めているとはいえない。国内の人口は日に日に増加しており、その減少の恐れは断じてないが、しかし年々中国の富が失われるのは、早急に徹底した対策をたてる必要がある。現在、対外交易を断絶することは不可能であり、禁令は実効がない。可能な方策は旧例に照らして、アヘンを薬剤として扱って外国商人に税金を納めさせ、海関を通って行商に渡ったのちは、銀での取引を禁じて物々交換のみを許すことである。外国商人の納税額も、従来の賄賂よりは軽くすむから、彼らも喜んで従うだろう。

『黄爵滋奏疏許乃済奏議合刊』，中華書局，1959 年

＜資料４＞　林則徐「各国の商人にアヘンの提出を命ずる論」1839 年 3 月 18 日

今回、本欽差大臣（林則徐）は都にて皇帝陛下の御命令を面奉し（カントン）に派遣されのであるから、法令は必ず実行するつもりである。かつ、すでに欽差大臣の官印を帯びているから、自分の裁量で事にあたることができ、一般事件の取り調べとはわけが違うことを覚悟せよ。もし、アヘンの禁絶が遅れれば、それだけ本大臣のカントン滞在ものびることになるぞ。誓って本大臣はアヘンの禁絶と終始取り組み、途中でやめるつもりはさらさらない。ましてや、中国国内の民情はといえば、皆な（アヘンの害毒に）義憤を感じているではないか。

『林則徐集・公牘』

☆道光帝のとった政策：アヘン禁止

アヘン厳禁論者の（　　）を特命全権大使として広州に派遣し、

反発したイギリス商人からアヘンを没収する。

## Ⅱ　アヘン戦争と南京条約

設問８　『イギリスはアヘンを理由に戦争することをどのように考えたと思いますか。』

＜資料５＞　若き日のグラッドストンの演説･･･後イギリス自由党党首

大英帝国の国旗は、今や、かの醜悪なアヘン貿易を保護するために掲げられることになった。国旗の名誉は汚された。

＜リサーチペーパー＞

## 宿題

○南京条約の内容について調べ、次回の授業の際に発表する。
追加条約についても同様に調べなさい。さらに、アメリカ･フランスとはどうだったのか。

○どのような点が問題で清朝は負けたのか。 敗戦後、どのようなことを改善しなければ成らないのか。問題点・改善策を列挙すること。

○日本はアヘン戦争についてどのように情報を得ていたか。
江戸幕府は対外政策を変更したか。

★下記の参考文献中より資料として掲載しました
資料１、２、３、４は
小島晋治・並木頼寿　『近代中国研究案内』　岩波書店
資料５は　綿引弘　『世界の歴史がわかる本』　三笠書房

## 4　分析と考察

（1）　A高校の場合

A校は大学進学を希望する生徒がほとんどである。２学年の「世界史Ｂ（３単位）」必修の授業で、担当する４クラスで行った。通常の授業形態は、教科書に沿って作成した書き込み式プリントを配布し、説明をしながら一緒に世界史重要用語などを記入し、要所要所で生徒に問いかけをし、意見を出してもらい、そのポイントを板書しながら講義を進めていく形式で、基本的に宿題は出さない。

指導案に基づき、第１時間目に今回の共通ワークシートで「アヘン戦争」の授業を行った。この授業では、通常より設問の数が多かったので、問いかけに対し生徒から出た意見やそのまとめを教員が口頭で説明し、板書する時間がなかった。生徒各人がそれぞれワークシートにメモをとり、帰宅後、その内容を自分でまとめ、他の資料なども利用しながら宿題として出した課題に対する答えを導き出すという形となった。また、時間割の都合上、宿題を発表する第２時間目は翌日になり、生徒としては時間的に余裕がない状況で発表することになった。次に生徒の感想をいくつか紹介する。

・面白い。調べるのは大変だけど、皆の考えを聞けたり、ただたんたんとノートを書いて線を引いてやっていくより、裏まで見えて来る感じ。今までより深く知ることができそう。
・今回、初めてこういう形の授業をやってみて、正直、自分にとっては難しくて、戸惑いました。「歴史って深いなー。」と改めて思わされた感じです。でも、ただ先生に「これこれこうだからこうなった。」と教えてもらうより自分で「どうしてこうなって、今につながっているのか。」というふうに考える方が自分のためになると思いました。やっぱり自分でいろいろ考えれば考えた分、身についていくような気がします。私は考えることはあまり好きな方ではないし、苦手だけど、すごく大切なことだと思います。だから、今回こういう機会を与えられてよかったです。
・一部の人はちゃんとシッカリ調べていたのですごいなぁーと思いました！でも私は、やっぱりいつもみたいな授業のほうがわかりやすくていいと思いました。みんなの考えたことが聞けるので、これはこれで楽しかったです。
・深い理解が得られるので良いとは思うけれど、世界史を好きな人でなければすごく大変だと思う。なるべくやって欲しくないです。
・自分で調べたり、自分の考えを書くのはとても大変で時間がかかった。１日で提出するのは時間が足りない。長期の休みの時ならいいけど・・・。

以上のような生徒の感想から、自分で調べたり考えたりするとより理解が深まるという点で、多くの生徒が今回の授業形式も良かったと評価している。実施した教員としても、今回の方法を４月最初の授業から世界史授業のスタイルとして行えば、徐々に生徒も慣れて、今回の研究主題である『基礎・基本の習得を通して問題意識を深め、自ら課題を追究し、解決・行動できる資質を育成する』ために有効な方法であると手応えを感じた。

注意点としては、生徒が自主学習に慣れていないはじめのうちは、授業の中での設問はもう少し少なく、宿題（課題）も一つにしたほうが取り組みやすく、宿題（課題）を発表する第２時間目まで２、３日の猶予があるほうが良いのではないか、と思われる点である。

（2）　B高校の場合

B校はどちらかというと基本的な内容の理解に時間がかかる生徒が多い学校である。B校では3年生1クラスを対象に授業研究を行った。通常は黒板を使ったいわゆる講義方式の授業を行っているクラスで、今回の指導案に基づき授業を行った。授業を行ってみて良いと感じた点は、授業中常に質問されるので、生徒に緊張感があり、作業をしないと次に進めないので、集中して授業に取り組むようになったことである。一方改善すべきと感じられた点は、本校の生徒に対しては別掲のワークシートでは作業が多く、1 時間の中ですべて行わせるのは困難だった点である。ワークシート作成の際にもう少しシミュレーションを行い、作業量の適正水準を考えるべきだった。ただしこの点は、日常的にワークシートを使って、書くことが習慣化されれば適正水準は変わってくると思われる。次に、宿題を課すという点だが、これも習慣化していなかったので、きちんとやり遂げたのは生徒の半数程度だった。本校の事例では、宿題を課してから次の発表の授業まで1週間の余裕があったので、途中経過を見せにくるようにさせたが、すべての生徒に対応することは時間的に難しく、今回のようにすぐ次の授業に発表がある場合は、途中経過を指導するというのは困難だと感じた。また、グラフを記入させるのはグラフを読み取らせるために行わせたのだが、本校のレベルでは、グラフは正確に記入できるが、そこから何かを読み取ることは難しく、グラフから読み取ることも発問を行って促していかないと困難だった。しかしこれも日頃の積み重ねしだいだと思われる。

次に、授業後に行ったアンケートからいくつか代表的な意見を見てみよう。

①通常の講義形式の授業と比べてどう感じたか？

・たくさんの授業を受けてきたけど、実は何も理解をしていなかったのに気づいた。
・最初宿題にされたときはやだなーと思ったけど、やってみると案外面白かった。
・調べるのはかまわないが、資料ばかり見て授業を受けるのはやる気がそがれる。
・先生にあてられた人だけが授業してるみたいだった。

②今回のプリントの設問についてどう思ったか？

・自分の思ったこと・考えを書くところが、その物事についてよりよく理解できた。
・普通のプリントは記入するだけだが、このプリントは自分の考えを聞いてくるから面白い。
・自分の思っていることを書くよりも、教科書から抜き出したりするのが好き。
・プリントはもう少し説明の多いものがいい。自分で書くところとの割合が５：５で。

アンケートの結果では、肯定的な意見と否定的な意見がほぼ半々であり、否定的な意見の中でもプリントの構成（資料ばかり見るのは？、教科書から抜き出して書くところも必要では？）については否定というよりも改善点として受け入れるべきだと考える。「あてられた人だけが・・」という点は、全体を見渡して授業者が常に気をつけるべきことであり、これも改善点といえるだろう。まとめてみると、細かな改善点は多々あるが、生徒を活動させ、能動的に授業に向かわせるという点で、今回研究した授業計画は意義があるといえるのではないだろうか。

（3）　C高校の場合

C校は、ほとんどの生徒が大学への進学を希望している学校である。また、C校では大幅な選択制を取り入れた教育課程が編成されており、「世界史」は 2 年次での、「世界史A（2 単位）」と「世界史B（3 単位）」の必修選択となっている。本考察は、「世界史A」における 22 人クラス

での授業研究に基づく報告である。

通常、授業者は教科書・図説・書き込み式のプリントを用いて講義式の授業を行い、本授業研究のような発表形式の授業はほとんど取り入れていない。そのため、本授業研究に際し、「自分の考えを頭の中でまとめ、それを文章にして表現し、さらにそれを他の生徒の前で発表していく」という作業に、生徒は当初戸惑いを感じ、また、授業者も生徒に考える時間をどのくらい与えればよいのかを的確につかむことができず、当初の計画時間を大幅に上回ってしまった。

以下、ワークシートの設問に対する生徒の解答の分析を試みる。設問１に対して、生徒の解答は「中国の茶が安いから」、「中国から輸入して、他のヨーロッパ諸国に売るため」というものがほとんどで、授業者が期待した、産業革命時のイギリスの労働者の状態との関連を指摘した解答は１例であった。世界史を同時代史的にとらえる視点がなかなかともなっていかない例であろう。設問３に対しては、半数以上の生徒が、「公行」がイギリスの自由貿易を妨げるものであることを指摘し、その撤廃を方法論としてあげた。また、「中国に売りつけることができるものを探す」という解答もあった。基本的には、イギリス・中国間の貿易構造については理解されているとみることができる。設問５に対しては、ほぼ全員が「アヘン中毒者が増大し、社会的な混乱がおこる」という解答を出してきたが、経済的な影響については、「アヘン中毒が労働者の間にも広まり、生産力が落ちる」という解答が数例あっただけで、中国の税制との関連を指摘できる生徒はいなかった。これは、「世界史Ａ」では、明・清時代の社会経済をほとんど扱っておらず、仕方のないことと考えられる。設問６の作業は全ての生徒がこなしていたが、この作業を通して、授業者が何を生徒に問いかけたかったのか、明確ではなかったような気がする。設問７については、アヘン厳禁論の立場にたつ解答がほとんどであった。これは、設問５の解答から予想された結果であるが、その方法としては、「イギリスとの貿易をやめる」という解答と「アヘンを吸飲している中国人に厳罰を与える」という解答が半々であった。設問８に対しては、2/3 の生徒は否定的な立場にたち、1/3 の生徒が肯定的な立場に立った。否定的な立場に立った生徒の解答は「アヘンという一種の麻薬のために戦争をするのは非人道的である」といった理由が主であり、肯定的な立場に立った生徒の解答は「イギリスが自由貿易を実行するためには仕方ない」という理由が多かった。宿題部分については、「南京条約ほかの内容」については、おおむね生徒はよく調べてきていた。「清朝の敗因と改善点」については、「軍事力の差」を指摘する意見が多く、「世界の情勢をよく見る必要がある」、「諸外国に学び近代化を進める必要がある」といった改善点をほとんどの生徒があげていたが、授業者の予想と異なる解答は出てこなかった。最後の「日本との関係」については、無解答のものが多く、「世界史Ａ」選択者に対して、「日本史」を意識した授業の必要性を感じた。

（４）　まとめ

今回の授業方法は、通常の講義形式の授業と比べて、自分で考え調べなければならないという点で、今回の研究主題に沿った有意義な方法であると考えられる。改善点としては、突発的にこの方法を行っても生徒はすぐには考えることはできないので、年間計画の中に組み入れて、最終的に生徒が常に考え調べる姿勢を年間の中で身につけさせるようにした方が良い。またワークシートの形式や設問の構成を各学校の実態や年間計画に合わせて調整する必要を感じた。

## ＜日本史グループ＞

文治政治の展開

### 1　研究内容と方法

本グループでは、文治政治の展開を主題に以下の指導計画表の通り３時間構成で単元学習を設定した。全３時間の学習活動を通し、「基礎・基本の習得」を徹底させるとともに、課題を設定し、生徒に主体的に考察させたり発表の場を設けたりすることによって、自ら問題を解決し行動できる資質を育成することを目指した。なお、新学習指導要領では、「日本史Ｂ」の「(4)近世の社会・文化と国際関係」の「イ　産業経済の発展と都市や村落の文化」に位置づけて実施する。

本グループでは第３時において、生徒の関心・学校の実情等を勘案し、３校でそれぞれワークシートを作成して授業研究（事例Ａ～Ｃ）を行った。ワークシートの作成に当たっては、貨幣改鋳を主として財政・物価・景気の動向を理解させ、当時の為政者の政策を評価させた。Ａ校・Ｃ校では、貨幣の質に焦点を絞って、経済への影響を考察させた。Ｂ校では、当時の社会情勢にも目を向けさせるよう工夫した。

### 2　指導計画

| | 学　習　項　目 | 具体的な学習内容・学習活動 | 留　意　点 |
|---|---|---|---|
| 第１時 | 武断政治から文治政治への転換 | ・慶安事件を題材とし、武断政治の弊害について考える。<br>・武断政治から転換した幕府の政策を理解する。<br>・各藩における文教政策を理解する。 | ・幕政の転換がどのような政治的・社会的条件のもとでなされたか、その背景を明らかにする。 |
| 第２時 | 元禄・正徳期の政策 | ・綱吉の将軍就任経緯を確認する。<br>・綱吉の政策を、前半の天和の治と柳沢吉保登用後の後半に分けて理解する。<br>・新井白石登用の経緯を確認する。<br>・正徳の治の概要を理解する。 | ・綱吉の政策について、前・後半の違いを明確にさせる。 |
| 第３時 | 元禄・正徳期における貨幣改鋳 | ・貨幣制度、貨幣と経済の関係を理解する。<br>・荻原重秀が財政難対策として行った貨幣改鋳について考える。<br>・新井白石が前代の批判の上で行った貨幣改鋳について考える。<br>・元禄・正徳期の政策の違いを確認し、その政策を評価する。 | ・グラフ等の適切な資料を提示し、生徒が主体的に問題解決学習に取り組めるようにする。 |

## 3　授業研究（第３時　元禄・正徳期における貨幣改鋳）

### （１）授業研究事例Ａ

#### ア　本時のねらい

文治政治の展開の中から「元禄・正徳期における貨幣改鋳」を取り上げ、まず当時の貨幣制度、貨幣と物価・景気とのかかわり、幕府の経済政策について「基礎・基本の習得」を図る。次に資料等の読みとりによって、元禄期の荻原重秀と正徳期の新井白石の異なった政策を主体的に考察・評価させ、歴史的思考力を培い、自ら課題を追求し、解決・行動できる資質を育成する。

なお、貨幣と経済の関係は近代史以降も頻繁に扱われ、国際関係にも影響を与えてきた重要な問題なので、本時の学習が今後の学習にも活かされるようにしていきたい。

#### イ　本時の展開

| | 学　習　項　目 | 学　　習　　活　　動 | 指導上の留意点 |
|---|---|---|---|
| 導入 | 貨幣の種類 | ・貨幣の種類、性質等を確認する。 | ・実際に貨幣を提示し、興味・関心をもたせる。 |
| 展開 | 貨幣と経済の関係 | ・貨幣の質と物価の関係、貨幣の発行量と景気の関係を確認する。 | ・例外もあることを指摘しておく。 |
| | 元禄期の貨幣改鋳 | ・勘定吟味役荻原重秀の意見を取り入れて、貨幣改鋳を行ったことを確認する。 | ・作業をさせ、小判の質の変化に着目させる。 |
| | | ・資料等を読みとり、貨幣改鋳の内容・荻原重秀のねらい・改鋳の影響を考察してワークシートに記述し、代表者が発表する。 | ・机間指導を行い、適度に助言を与える。 |
| | 正徳期の貨幣改鋳 | ・新井白石が貨幣改鋳を行ったことを確認する。資料等を読みとり、貨幣改鋳の内容・新井白石のねらい・改鋳の影響を考察してワークシートに記述し、代表者が発表する。 | ・作業をさせ、小判の質の変化に着目させる。<br>・机間指導を行い、適度に助言を与える。 |
| | 荻原重秀・新井白石の経済政策の評価 | ・両者の政策を評価してワークシートに記述し、代表者が発表する。 | ・生徒が評価しやすいよう、両者の政策のプラス面とマイナス面を整理する。 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| | | | ・発表に対し、適切なコメントを行う。 |
| まとめ | 元禄・正徳期の経済政策のまとめ | ・経済政策の結果、経済が混乱し、財政悪化も解消されない中で、改革の必要性に迫られている状況を理解する。 | ・元禄・正徳期の経済破綻が、後の三大改革につながっていくことを意識させる。 |

**ウ　評価の観点**

①「元禄・正徳期の貨幣改鋳」について、興味や関心をもつことができたか。

②江戸時代の貨幣制度について、「基礎・基本」を習得することができたか。

③資料等を分析し各設問に答えることによって、貨幣改鋳を行った為政者のねらいと、そのためにおきた経済・社会の変化を理解することができたか。

④「元禄・正徳期の貨幣政策」の違いを理解し、評価することができたか。

⑤全体を通し、自ら考え、課題を追求する姿勢がみられたか。また、その過程を通じて、「基礎・基本」の習得の徹底が図られたか。

**エ　考察**

まず前半における貨幣制度についての「基礎・基本」であるが、難しい題材ではあったものの前時における事前学習の効果もあり、比較的多数の生徒が習得できたようである。しかし、主体的に学習させる後半部分の時間を確保するために説明がやや速くなってしまい、一部理解できていない生徒がいたことも事実である。時間配分を考慮しつつも、重要な部分についてはゆっくりとした丁寧な説明が必要であった。次に資料の分析・考察であるが、このような学習にあまり慣れていなかったためか、なかなか資料の読みとりができない生徒がいた。そのような生徒には、助言を与えることによって何とか正解を導き出すことができたが、資料分析に対する習熟不足を感じた。授業の最後に、荻原重秀と新井白石の貨幣改鋳の違いを評価させた。この検証授業を行ったクラスでは、荻原支持が１５名、新井支持が１４名、両方支持しないが２名という結果で、ほぼ半数ずつに評価が分かれた。支持の理由については、荻原支持では「物価が上がり庶民の生活は苦しくなったが、少なくとも財政・景気面で結果を残した。」、新井支持では「結果は失敗したが、庶民のために物価を安定させようとしたその気持ちを買いたい。」という意見が多かった。理由をみる限りでは、それぞれの政策の違いを理解した上で評価できていたようである。本時の授業を受けた感想では、「今回のような、自分で考え答えを求めていく授業は良かった。頭の中に入りやすいし、今後自分で考える機会が多くなってくるから。」というものが多く、自ら考え課題を追求することで、「基礎・基本」の習得の徹底が図られていたと判断できる。しかし、中には「いつもの授業の方が良かった。」という意見もあり、本時の効果をより大きくするためには、今後もこのような形態の授業を継続的に行い、主体的な学習に慣れさせる必要性があると感じた。

（2）授業研究事例Ｂ

ア　教材構成上の視点

① 元禄時代と正徳時代の貨幣改鋳がそれぞれどのような目的で行われたかを、政策を推進した二人の人物を通して理解できるよう工夫した。

② 貨幣改鋳にともなう貨幣の質の変化が、物価（主として米価）の動向にどのような影響を与えたかを具体的に理解できるよう工夫した。

③　３度にわたる貨幣改鋳が行われた元禄八（1695）年から正徳五（1715）年までに国内で発生した主な出来事の年表を作成し、その年表と米価の推移をまとめたグラフを比較させることにより、米価の変動の要因について理解できるよう工夫した。

イ　指導上の留意点

①　生徒に対して「これはなぜ起こったと思うか」、「このような結果になったのはなぜだと思うか」などの質問を行い、教員が説明する場面でも一方通行の授業にならないよう配慮した。

②　教員の発問やプリントの質問に対する答えを生徒に発表させ、その答えに対して教員がすみやかに評価を行った。これは生徒が自分の答えに対する評価を得ることで、やる気が促されることを期待するとともに、自分が努力した結果が授業の中で認められたり、自分の発言や答えが授業の中で生かされたという体験が、自分自身に対する自信を深めさせ、生徒一人一人の自己有用感の形成に効果があるのでないかと考え、実践を行った。

ウ　評価の観点

①　異なる複数の資料を分析し、質問に対する解答を導き出すことができたか。

②　自分の答えと他の生徒の考えを比較して、より適切な答えを導き出すことができたか。

③　貨幣改鋳が米価を引き上げる要因であったこと、また改鋳以外にも米価を変動させる要因があったことを、資料を参考として考えることができたか。

④　江戸時代の貨幣制度について理解することができたか。また江戸幕府が実施した貨幣改鋳は、それぞれの時代の経済状況に対応するために実施されたことを理解することができたか。

エ　考察

①「貨幣の質の変化が物価を変動させる要因となることを初めて知ったが、同時期に発生した天変地異も物価変動の原因の一つではないかと思う。」と解答する生徒がいるなど、複数の資料を検討し、答えを導き出す学習は成果があったと考えられる。「新井白石の貨幣改鋳がなぜ物価をさらに上昇させたのか、その理由を知りたい。」自分が疑問に感じたことや興味を抱いたことを教員に質問したり、自分で調べたりする生徒がいるなど、日本史に対する興味や関心を高め、さらに学習を深めようとする生徒もいた。

② 50 分間で実施可能な指導案を目指したが、江戸時代の貨幣制度の概略や貨幣の質と質の変化が物価にもたらす影響についての説明に予想外の時間がかかった。そのため、事前に貨幣制度の概略や貨幣と物価との関係について説明をする必要を感じた。また生徒にとって貨幣と経済との関係は理解しにくいところである、そのため生徒の理解がより深まるよう、現代社会や政治・経済など公民科との連携をより一層図らねばならないと考えた。

### （３）授業研究事例Ｃ

#### ア　教材構成上の視点

授業では、すでに生徒の発表授業を年間を通して計画していたので、生徒は、あらかじめ教員が提示した課題（全21テーマ）から1人1つを選択して、発表授業の準備を行った。本時では、「元禄・正徳期の貨幣改鋳とは何か。その結果、社会や経済はどうなったか。」という課題を設定して、事前に生徒に調査させ、当日は、その発表授業と、ワークシートに沿いながら課題学習する授業とを、2時間扱いで学習した。そこでは、「元禄・正徳期における貨幣改鋳」について興味や関心をもたせ、資料から読み取ることを通じて、幕府の経済政策の内容とその社会的影響を理解させることをねらいとした。

#### イ　指導上の留意点

①発表の準備が十分に行われ、かつ発表時の質疑応答が活発なものとなるよう指導する。

②江戸幕府の経済政策への興味関心が高まり、かつ理解が深められるよう、江戸時代の通貨についての基本的な知識について補足説明する。

③資料－史料文やグラフ（「通貨発行量」）－の読みとりが的確に行われるよう留意する生徒の反応によっては補足説明を加え、生徒が十分に考えられる時間を確保する。

#### ウ　評価の観点

①「元禄・正徳期における貨幣改鋳」について、興味や関心をもつことができたか。

②江戸時代の貨幣制度について、「基礎・基本」を習得することができたか。

③資料から読み取ることを通じて、江戸幕府が財政の悪化に対してどのような政策をとり、その結果、社会ではいかなる変化が起きたかを理解できたか。

④ワークシートの設問に沿って自ら考え、課題を追求する姿勢がみられたか。

#### エ　考察

①生徒の発表活動では、貨幣改鋳の意味や貨幣改鋳の影響について十分な説明がなされなかったので、事前指導の不足を感じた。しかし、その点について生徒から質問が出され、この点は次の2時間目の授業の導入とすることができた。

②ワークシートの作業を通じて、概ね「基礎・基本」の習得が達成された。

③このワークシートには、荻原重秀と新井白石のどちらの貨幣改鋳を支持するか、またはどちらも支持しないかを、理由とともに記入させた。授業後に回収したワークシートによれば、「荻原重秀を支持した者」（ａとする）が10名、「新井白石を支持した者」（ｂとする）が5名、「どちらも支持できない者」（ｃとする）が5名であった。ａの理由は、「貨幣の質が多少悪くても景気が良くなればいいなと思って選びました。」、ｂの理由は、「貨幣の質が上がったので。」、ｃの理由は、「庶民の生活を考えていた新井白石の政策も、結果的には物価が上昇してしまったので、庶民の私としてはどちらも支持できない。」などの回答がみられた。2つの財政政策を比較し、その結果をふまえて価値判断することで、学習内容を自分の中で再構成できたようである。特に、「庶民の私」という立場から考えられた点は、本授業のささやかな成果である。授業に対する感想では、「自分で学習するのは難しいが楽しかった。」などが多かったが、「いつもの方が良いと思う」という感想もあり、主体的な学習活動を継続的に行うことの必要性を感じた。

# c元禄・正徳期における貨幣改鋳

(1)貨幣の種類（1　　）

金貨（主に東日本）　　銀貨（主に西日本）　　銭貨（全国）

・どこでつくられるの？（2　　）　（3　　）　（4　　）

・三貨の交換率は？　１両＝銀５０（６０）匁＝銭４貫文（1貫文=1000文）

・金貨といっても１００％金でできているわけではない。（資料１参照）

(2)貨幣の質・発行量と物価・景気の関係

＜貨幣の質＞

・質が悪い→貨幣の価値が下がるから物価は（5　　）

・質が良い→貨幣の価値が上がるから物価は（6　　）

＜貨幣の発行量＞

・発行量が多い→景気が（7　　）なる

・発行量が少ない→景気が（8　　）なる

※実際にはこの通りにならない場合もある。

(3)元禄期の貨幣改鋳

・貨幣改鋳って何？　（9　　）

・具体的にだれがどういうことをやったか？

勘定吟味役（10　　）による（11　　）発行

＜作業＞資料１にある元禄小判のグラフを、慶長小判と同じように金の含有率を表して完成させなさい。

☆資料から荻原重秀の貨幣改鋳を考えてみよう。

問１．元禄小判は慶長小判と比べてどのような金貨か？

（12　　）

問２．荻原重秀が貨幣改鋳を行ったねらいを、問１の結果と資料２から答えなさい。

（13　　）

問３．問１の結果荻原は貨幣の発行量を多くしたが、このねらいは何か？(2)の関係を参考に考えなさい。

（14　　）

問４．(2)の関係や資料３から、この貨幣改鋳が庶民にとってマイナスになっている点を答えなさい。

（15　　）

(4)正徳期の貨幣改鋳

・具体的にだれがどういうことをやったか？

（16　　）による（17　　）発行

＜作業＞資料１にある正徳小判のグラフを、金の含有率を表して完成させなさい。

☆資料から新井白石の貨幣改鋳を考えてみよう。

問５．正徳小判は元禄小判と比べてどのような金貨か？

（18　　）

問６．新井白石が貨幣改鋳を行ったねらいを、(2)の関係から答えなさい。また実際そのねらい通りになったのか？その結果を資料３をみて答えなさい。

ねらい（19　　）

結果（20　　）

問７．問５の結果、幕府財政はどうなったか？

（21　　）

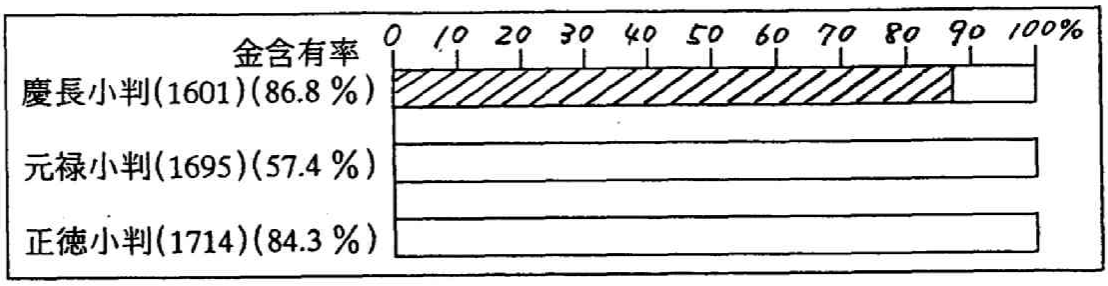
問８．問５の結果、貨幣の発行量は少なくなってしまったが、このためにおきた経済のマイナス点を(2)の関係を参考に答えなさい。

（22　　）

(5)荻原重秀と新井白石の経済政策の評価

私は（荻原重秀・新井白石）を支持する。
＜理由＞

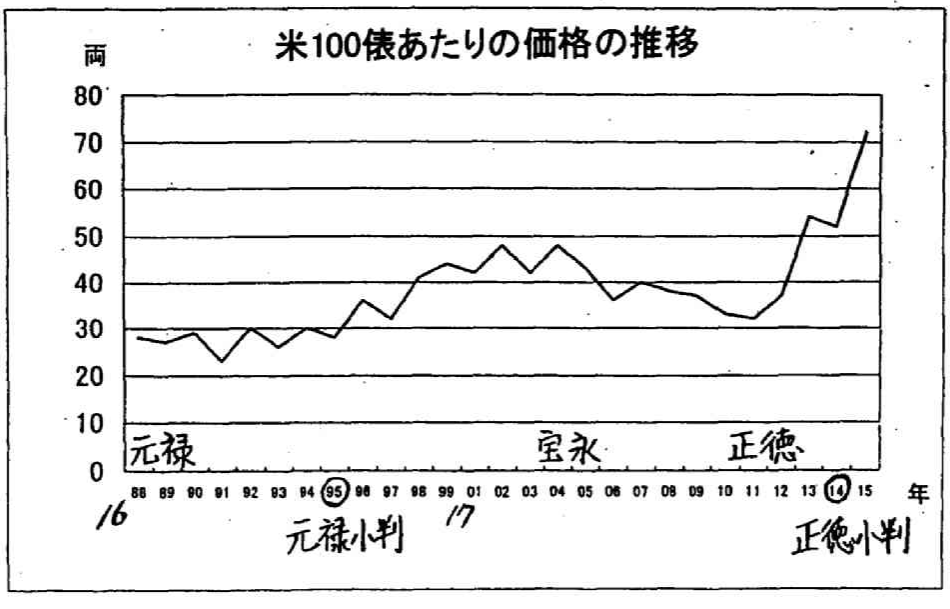
＜資料１＞小判１両中の金成分比




＜資料２＞「折たく柴の記」（新井白石）という書物の一部抜粋（現代語訳）

……かさねて荻原重秀に案を出させたところ、こう言った。「前代将軍綱吉公の時、毎年の支出額が収入額の２倍に増え、国家財政が早くもつまずいていたので、元禄８年(1695)の９月から金銀貨を改鋳された。それから今にいたるまで、毎年、幕府が改鋳によって得た差益額は合計で約５００万両になり、この利益でいつも財政の不足分を補っていたのであるが、……」

＜資料３＞




（土肥鑑高著「近世物価政策の展開」の付録の近世米価表をもとにグラフを作成。）

ワークシートＢ

# 重　秀　と　白　石

荻原重秀（1658 ～ 1713 年）

下級旗本出身であったが、経済官僚として順調に出世をかさね、将軍綱吉の時代には、勘定吟味役となり、ついで 1696 年には貨幣改鋳を建議し、それがきっかけとなって貨幣改鋳の責任者となった。彼の貨幣改鋳により幕府は元禄八年から十六年までの間に４６０万両の益金をあげた。６代将軍家宣の時代になっても、勘定奉行として財政政策を推進したが、1712 年新井白石との対立の中で奉行職を罷免された。

新井白石（1657 ～ 1725 年）

２度にわたる主家の改易にも関わらず学問をかさね、30 才の時木下順庵の門人となり、その推挙で徳川家宣の侍講（「じこう」）さらに側近の政治顧問となった。政治家として重視したのは、金銀貨幣の改鋳問題で、貨幣に対する人民の期待を裏切ってはならないと考え、その責任者たる荻原に反対の立場をとり、荻原の追放と、貨幣の品位を従来のものに戻した。政治家として活躍する一方で、歴史学や地理学などの分野で業績をあげた。

問　題　荻原重秀の貨幣改鋳はどのような理由で行われたか、史料を読み空欄に適語を入れなさい。

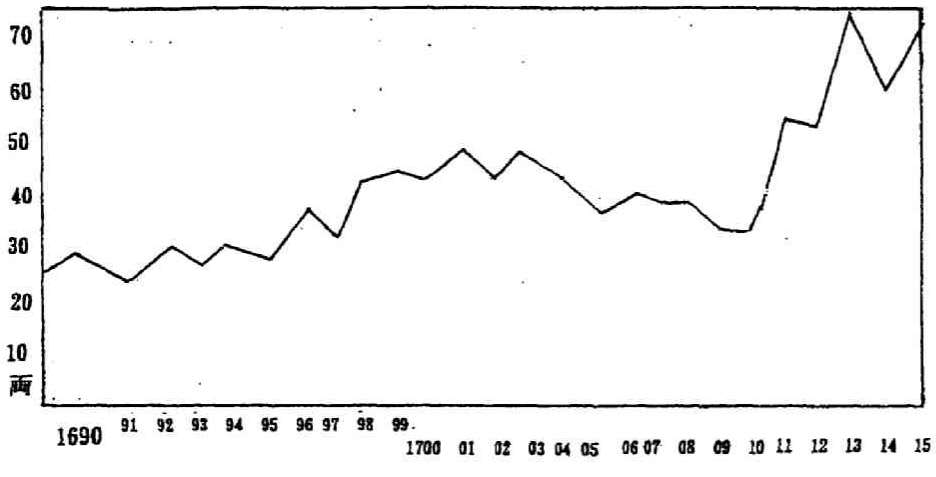
> 金銀（金貨＝小判・ここでは「慶長小判」、銀貨＝「丁銀」など）極印古くなり候に付き吹き直す（鋳造し直す）べく仰せ出さる（命令される）旨、かつまた近年山（鉱山）より出候金銀も多くこれなく、世間の金銀（市場に流通している金貨や銀貨）も次第に減じ申すべきにつき、金銀の位（品位）を直し、世間の金銀多くなり候ため、この度これ仰せら候こと。　（「御触書寛保集成」より）

貨幣改鋳は まず第１に、小判や銀貨が本物であることを証明する極印（ごくいん）が、流通するうちに摩耗し本物かどうか判断がつきにくくなっているから、極印をうち直す必要があるとしている。

第２には、鉱山からの金銀の産出量が（　　）していること。そして第３には、市場で必要とされる貨幣の流通量が（　　）しているため、発行量を（　　）させる必要がある。以上３つの理由により改鋳は実施された。

問　題　荻原重秀の貨幣改鋳はどのような影響をあたえただろうか。資料をみて問題に答えなさい。

質問１：米価の推移をしめすグラフをみて、貨幣改鋳の以前と以後では米価はどのように変化していますか。




百俵（35 石）あたりの米価の推移をしめすグラフ

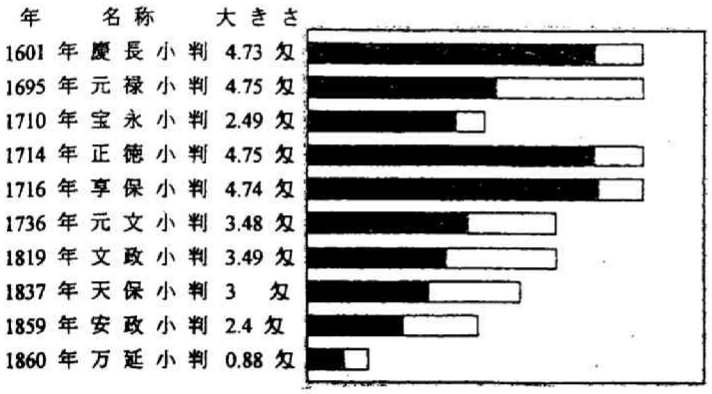
貨幣改鋳は以下の年に実施された
1695･1710 年〔荻原重秀〕
1714 年〔新井白石〕

（土肥鑑高著「近世物価政策の展開」付録の近世米価表をもとにグラフを作成した）

答え

問　題　荻原重秀の貨幣改鋳は、教科書では財政収入を増加策として計画され、実施された。そして幕府は質の劣った小判の発行を増加し多大な増収を得たが、物価の騰貴をひきおこし、人々の生活を圧迫したと評価されている。では貨幣の改鋳によりなぜ物価が上昇したのかグラフや資料をみて考えてみましょう。

資料１・江戸時代の小判の成分比の変遷をしめすグラフ




このグラフは小判１枚あたりに含まれる金の含有量をしめしたものです。
時代によって小判の品位が異なることを確認してください。なお当時の小判は金と銀の合金製でした。

グラフで色が濃い部分は金の含有量をしめしている
小判１両の重さ（１匁＝3.75 グラム）

質問１：元禄小判の金の含有量はどう変化しましたか。

| 答え |
|---|

質問２：小判１枚あたりに含まれる金の量が減少すると、どのような影響があるとおもいますか？
小判に含まれる金の品位が低下すると　→　小判１枚あたりの価値は（　　）する。
小判１枚あたりの価値が（　　）すると　→　相対的に物価が（　　）する。
＊　つまり貨幣改鋳が行われ、小判の品位が（　　）したことが、物価が上昇した原因の一つとなったと考えられる。

資料２・元禄八（1695）年から正徳五（1715）年までの主な出来事

| | |
|---|---|
| 1695 年 | 元禄の貨幣改鋳実施 |
| 1697 年 | 古金銀の通用期間を限り、新規に鋳造された貨幣との交換を命じる |
| 1698 年 | 江戸で大火事（「勅額火事」）が発生する |
| 1699 年 | 諸国暴風雨により凶作が深刻化する |
| 1700 年 | 幕府より全国の酒造業者に「酒造半減令」がだされる。 |
| 1702 年 | 凶作のため奥羽地方で餓死者が多数発生。蝦夷でも松前飢饉となる。 |
| 1703 年 | 南関東に大地震発生、江戸市中でも建物の倒壊・火災が発生する |
| 1704 年 | 浅間山の噴火、さらに利根川流域でも出水被害が発生した。 |
| 1706 年 | 元禄銀を改鋳する（「宝字銀」の発行） |
| 1707 年 | 宝永地震発生、さらに富士山の噴火により武蔵・相模・駿河で降灰被害が深刻化 |
| 1710 年 | 宝永の貨幣改鋳実施（「乾字金・宝字銀」の発行） |
| 1714 年 | 荻原重秀罷免、正徳の貨幣改鋳実施 |

質問３：右の年表と問題１のグラフをみて、気がついたことをノートに書きなさい。

質問４：教科書では物価の騰貴は貨幣改鋳により発生したと記述されていますが、あなたはどう考えますか、ノートにあなたの考えを記しなさい。

ワークシートC

# 文治政治の展開

## 1．武断政治から文治政治へ

### （1）家綱政権（1651～1680）

①武断政治 → 大名の改易 → （　　）・（　　）者の増加
②1651年 徳川家光 死去 → 家綱４代将軍に(11歳) → １６５１年、（　　）の乱
③文治政治への転換　1651年、（　　）の禁止を緩和（50歳以下の大名に）
1663年、（　　）の禁止

### （2）元禄時代（1680～1709年）と正徳の治（1709～1716年）

人物紹介 －新井白石（1657～1725）－

江戸中期の朱子学者。６代・７代将軍を補佐して正徳の治を行った。小藩の武士の子として生まれたが、木下順庵の門人となり、その推薦で甲府藩主徳川綱豊(のちの６代将軍家宣)の侍講（儒学の師）となった。
1710年、朝廷と幕府の関係を改善するため、閑院宮家という宮家を創設した。
1711年、(朝鮮) 通信使の待遇問題で簡素化を実施した。
1712年、勘定奉行の荻原重秀を罷免し、1714年に貨幣改鋳を実施して正徳小判を発行した。
1715年、長崎新令を出し、長崎貿易に制限を加えた。
著書には、歴史書『続史余論』、自伝『折たく柴の記』など多数。

## 2．元禄・正徳期における貨幣改鋳

### （1）幕府財政の赤字

①1657年 （　　）＝（振袖火事）→ 死者10万人を超える → 江戸の復興費用
②（　　）産出量の減少
③綱吉の豪華な生活・大寺院造営 → （　　）寺・護持院

### （2）貨幣改鋳

人物紹介 －荻原重秀（1658～1713）－

下級の旗本であったが、畿内の検地の際に頭角をあらわし、出世を重ねて勘定吟味役となり、さらに1696年には勘定奉行となった。で、江戸幕府の財政難を打開するため、５代将軍綱吉の政治において、貨幣改鋳を実施した。
1695年（元禄8)、貨幣の改鋳を行い、元禄小判を発行した。
1712年、新井白石によって罷免された。

課題１　下の金貨成分表について、次の各成分の数値を、それぞれの小判にあてはめて横グラフを作成しなさい。ただし、１匁＝3.75ｇである。

元禄小判 ＝ 4.76匁（金の含有率は57.4%）　　正徳小判 ＝ 4.76匁（金の含有率は84.3%）

| 種　別 | 年 | 重　量<br>1　2　3　4 | 含有量（%）<br>20　40　60　80　100 |
|---|---|---|---|
| 慶長小判 | １６０１ | | |
| 元禄小判 | １６９５ | | |
| 正徳小判 | １７１４ | | |

課題2　左下の金貨成分表を見ると、元禄小判は、慶長小判と比べてどのような金貨であったか。
金の含有量は（　　）、貨幣の質は（　　）

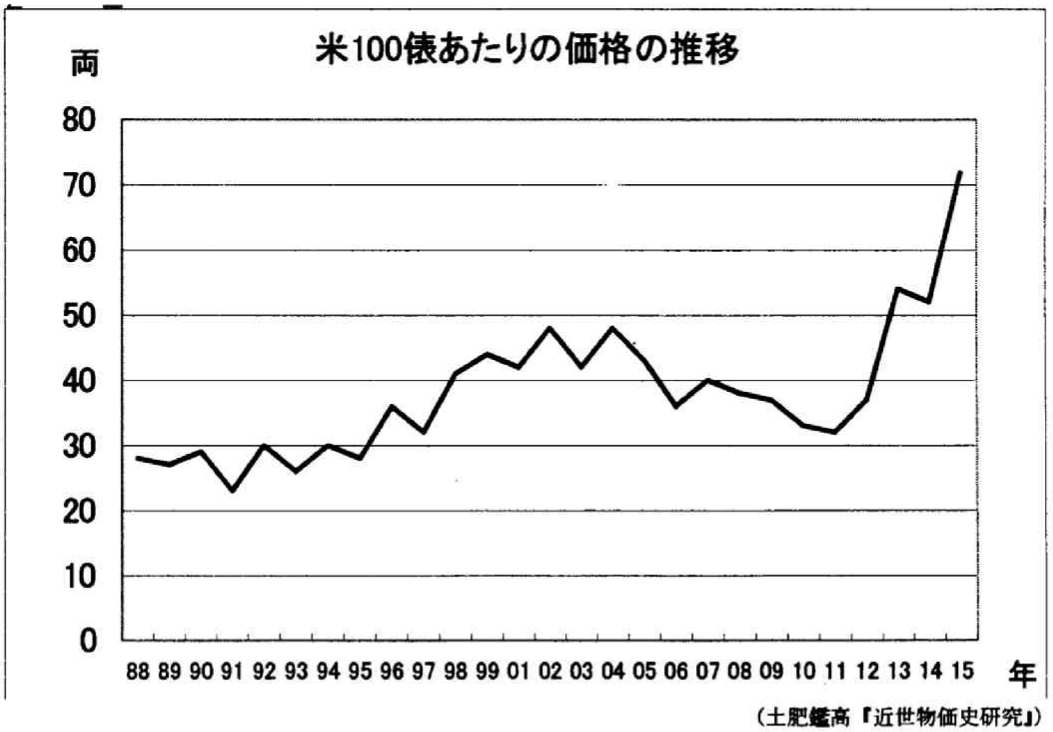
課題3　左下の金貨成分表を見ると、正徳小判は、元禄小判と比べてどのような金貨であったか。
金の含有量は（　　）、貨幣の質は（　　）

課題4　下の史料は、新井白石の「折たく柴の記」からの引用である（わかりやすく改めた）。この記述から、荻原重秀が行った貨幣の改鋳は、幕府財政にとってどのような結果をもたらしたか。
改鋳によって（　　）により、幕府財政は（　　）

> 荻原重秀に案を出させたところ、こういった。「前代の将軍綱吉公の時、毎年の支出額が収入額の２倍も増え、国家財政が早くもつまづいていたので、元禄8年（1695）の9月から金銀の貨幣を改鋳した。それから今に至るまで、毎年、幕府が改鋳によって得た差益額は合計で約500万両になり、この利益でいつも財政の不足分を補っていたのであるが、元禄16年（1703）の冬におこった大地震のために傾いたり壊れたりした所を修理するに及んで、毎年入っていた差益額もたちまちなくなってしまった。」

課題5　下のグラフは、米の価格の変動を表したものである。荻原重秀が元禄の貨幣改鋳を行ったのが、1695年（元禄8）とすると、米価はどのように変動したか。（　　）

課題6　下のグラフを見て、1714年（正徳4）に新井白石が正徳の貨幣改鋳を行ったことで、米価はどのように変動したか。　（　　）



（土肥鑑高『近世物価史研究』）

課題7　荻原重秀と新井白石の経済政策について、どちらを評価しますか。下に記しなさい（理由を記す）。

①私は、（ 荻原重秀 ・ 新井白石 ）を支持する。
②私は、どちらも支持できない。
＜理由＞

今回は、作業学習を中心に考えてもらう授業を試みてみました。授業の感想を書いて下さい。

３年　　組　　番　氏名

**〈地理グループ〉**

地理グループでは、「環境問題」を教材として取り上げた。この問題は様々な科目で教材化できるテーマであるが、「地域」を学ぶという地理の特性を重視しながら、効果的な授業づくりを目指し研究を行った。

**1　地理の授業で環境問題を取り上げる視点**

（1）　地理独自の観点

環境問題は、理科・家庭科・公民科などでも授業で取り上げられている。が、地理において地域性や諸地域の国際的な結びつきを学習する視点から、様々な事象（例えばヒートアイランド等）を扱うことによって、国内外における環境諸問題を理解させ、いかに我々の生活に結びつきが深いかを認識させることができる。それからさらに生徒達が、「なぜ？」「どうして？」といった意識を深め、追究意欲に転換することができる。

（2）　テーマを掘り下げることにより自ら学習を深化できる観点

項目・現象などを断片的に暗記するのではなく、テーマを掘り下げることによって、生徒たちは自ら学びさらに学習を深化できる。たとえば、京都議定書に絡みメディアを通じて南北問題あるいは日本と東南アジアの貿易などを具体的に理解させ、自ら置かれている環境問題にまで興味・関心を発展させことができる。

（3）　生徒に提示できる身近な教材を活用できること

我々日本が資源の多くを輸入に依存していることを、身近な題材（食糧問題等）や手に取る教材を授業で提示することができる。身近な実物教材を提示し、そこから問題性を考えさせることができるというのは、地理という科目の特長である。たとえば、食料品については、その輸出国は様々で、より生徒の興味・関心に結びつくものが溢れている。それら身近な教材を充分に活かし「どこの国から？」「どのように生産されるのか？」「生産されるための問題は？」等へと諸外国の環境破壊と現象が起こしている地域の姿と諸外国の結びつきを理解させ、さらに環境保護へと意識改革を図ることができる。

（4）　地域と地域の結びつきから捉えられる観点

単語の意味や内容だけという平面的な捉え方のみに終わらず、地理特有である地域と地域の結びつきを物や人の移動を例に挙げ空間的理解を養わせることができる。

（5）　地名・場所・地図・統計など地理特有の教材を利用

基礎・基本とされ暗記項目としてとらわれがちな地名・場所を、生徒の認識形成を助けるビジュアル的資料を活用し、興味・関心をもたせることによって学習させることができる。また、地図を活用することにより読図力を育成したり、統計を活用することにより諸現象を読みとる力を伸ばすことも可能である。

（6）　“人間”が登場する科目として

環境を脅かす諸問題は、そこで生活する“人”へと最も深く関わる。特に、環境破壊による原材料輸出国の第一次産業労働者への影響は、先進国の豊かさとの対比を含め、最も深く生徒に理解させたいことである。と同時にその解決について考察させ主体的に発展させたい。以上の視点から、以下にあげる森林破壊に重点を置き、研究主題に沿った授業展開の工夫を試みた。

## 2　熱帯林破壊を取り上げた理由

現代社会においては、地球温暖化や砂漠化、大気汚染、森林破壊など、さまざまな地球的規模の環境問題がある。これら環境問題に該当する項目を、地理の授業において一つ一つ取り上げて学習することは、授業時数を多く費やし、内容においてもポイントとなる事柄が多くなり、かえって生徒の混乱を招き、基礎・基本の習得にも悪影響を及ぼすおそれがある。また、個々の現象や知識の理解に重点が置かれがちになると、環境問題がわれわれの日常生活に深い関わりを持っているということを、生徒に認識させることがおろそかになると考える。そのため、網羅的な学習は避け、日常において、より身近にとらえることのできる話題を授業に積極的に導入し、生徒の興味関心を喚起し、問題意識を深めたいと考えた。

今回の研究では、熱帯林破壊を取り上げた。このテーマによって教材化できる事柄は、多様である。その一つとして、日本と世界の結びつきを挙げることができる。熱帯林の伐採による木材の輸出入という関係に加え、私たちが食している「エビ」の養殖が、熱帯林破壊と大きく関係していることを取り上げれば、「エビ」の輸出入が環境破壊の背景にあることと結びつく。このように、世界の諸地域の結びつきを、生徒は多面的に学ぶことができる。

熱帯林破壊の激しい地域を地図により調べてみると、アマゾンや東南アジアであることがわかる。そのうち、東南アジアの熱帯林破壊は、ラワン・チーク材という木材伐採によるものばかりではなく、海岸部に広く分布しているマングローブ林の伐採によっても引き起こされている。このマングローブ林の伐採の大きな原因としてあげられるのが、「エビ」の養殖池の開発である。つまり、日本における「エビ」の需要が熱帯林破壊を引き起こしているということがいえる。東南アジアでは、深刻な熱帯林破壊がおこっているが、実は遠く海の向こうの日本の生活事情が、環境破壊の一因となっており、さらには、これが地球的規模の環境破壊にもつながっているということを、生徒に認識させられるであろう。また、環境破壊及びそれらを引き起こす要因によって生じた現地の人々の生活の変化を取り上げながら、地域を理解させる学習に発展させたり、南北問題や大量消費社会などにも話題を広げながら、問題の解決を生徒に考察させることもできるであろう。

一方、生態系を構成する重要な要素である森林資源の破壊は、地球温暖化や大気汚染、土壌流出や砂漠化など、地球的規模で問題となっている様々な環境問題へも悪影響を与え、われわれ自身の生活もおびやかされている。このように、生態系の破壊は、われわれ人間の生活の舞台そのものの破壊を引き起こすことを生徒に認識させるとともに、森林の重要性についてより深く考えさせることができると考える。

以上のように熱帯林破壊のもつ多面的な問題性を教材として生かしつつ、身近な地域、身近な話題を授業で取り上げることで、生徒が興味・関心に基づき学習を深められると考える。また、地図・グラフ・統計を読みとったり、作業したりすることにより、的確に基礎・基本の習得を行い、生徒自らが問題意識を深め、課題解決について考えていけるような授業展開を工夫した。

## 3　授業研究

### （1）指導計画

| | 学習項目 | 具体的な学習内容 | 指導上の留意点 |
|---|---|---|---|
| 第1時 | 環境問題とは何か？ | 環境問題が発生した原因を考え、具体的な問題事項を列挙させるとともに化石燃料についての理解を深める。 | 原油、石炭などの実物教材を手に取らせ確認する。［注①］ |
| 第2時 | 身近な環境問題 | 「森林の重要性」について。<br>今夏の猛暑とヒートアイランド現象との関係、森林の放射冷却作用について新聞記事を活用する。［ワークシート①］ | 森林の重要性については、生徒に考えさせ、意見を出させる。新聞記事を音読させる。 |
| 第3時 | 南北問題の導入 | エネルギー消費量（原油）の比較(日本とインド)を統計から読み取る。先進国と発展途上国を地図帳を用いて確認する。［ワークシート②］ | 地図の中で国名を確認。［注②］ |
| 第4時 | 熱帯林はなぜ伐採されるのか。 | アマゾン川流域の森林伐採の原因と現状についてVTRを視聴。 | VTR視聴　［注③］ |
| 第5時 | 熱帯林と日本との関係Ⅰ<br>(本時) | タイから輸入されている食材やエビの養殖を取り上げることで日本とタイとの関係について考えを深める。［ワークシート③］ | ブラックタイガー、ペットフード、チューブ入りねりわさびなど実物教材を見せる。［注④］ |
| 第6時 | 熱帯林と日本との関係Ⅱ | マングローブ林とはどのような木で、どのように用いられているか、伐採の原因がエビの養殖池拡大と関係が深いことなどを考える。 | マングローブ林の特徴や熱帯林の有効性を押さえる。<br>VTR視聴　［注⑤］ |
| 第7時 | 熱帯林と日本との関係Ⅲ | マレーシアの森林伐採に日本が関わっていることに気付かせる。VTRを見て、自分の考えを書かせてまとめとする。 | VTR視聴　［注⑥］<br>地図でマレーシアのサバ州、サラワク州の位置を確認する。 |
| 第8時 | その他の環境問題 | 地球温暖化の現状・原因・対策について、副読本を活用してワークシートに記入する。 | VTR視聴　［注⑦］ |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 第9時 | ゴミ問題 | 温暖化の対策としてエネルギーの抑制の観点からゴミの問題を考える。ゴミを減らすためには何ができるか、身近にある再生品は何かを考える。3 R（リデュース、リユース、リサイクル）について考える。 | ダイオキシン問題を紹介する。身近にある再生品としてペットボトルの再生品を紹介する。<br>VTR 視聴　［注⑧］ |
| 第10時 | 環境先進国ドイツと日本の比較 | ドイツのフライブルク市のゴミの減量やパークアンドライド方式の取り組みを紹介する。［ワークシート④］ | 地図で位置を確認する。<br>VTR 視聴　［注⑨］ |
| 第11時 | 班別協議 | 身の回りで無駄にしているものには何があるか、環境問題に対して自分たちでできることは何か、を班に分かれて話し合う。 | ワークシートに記入する。 |
| 第12時 | 発表、報告 | 班別で協議した内容をそれぞれ発表する。 | 模造紙を使って発表する。 |

注①　『環境と公害を考える』（東京都教育委員会編）を副読本として生徒に配布。かつての公害問題では足尾銅山鉱毒事件や水俣病があったことやエネルギーと地球環境問題を概説する。

注②　『たみちゃんと南の人びと』（1987 年　明石書店）を使用して、エネルギー消費１人当りキログラム（石油換算）や乳児死亡率に見られる先進国と開発途上国との格差に着目させた。

注③　VTR『NHK 教育セミナー 世界くらしの旅』より『森林破壊』を視聴させ、アマゾン川流域の森林伐採について、気がついた点・疑問点などをノートに記入させる。

注④　『タイ　開発と民主主義』（1993 年　岩波新書）エビの養殖以外に焼き鳥、チューブ入り本わさびなどに至るまでタイで生産されていることを紹介。

注⑤　VTR『よみがえれ、マングローブ　海の森づくり』（東京海上火災保険［株］総務部）ではマングローブの生態に関して視聴した。

注⑥　VTR『地球と環境（熱帯林の減少）』（NHK ビデオ教材、環境教育指導ビデオシリーズ）を使ってマレーシアのサバ州でのラワン、タイでのマングローブ林の伐採の様子などを視聴。2075 年に熱帯林が消失した場合、温暖化が加速することが述べられている。

注⑦　VTR『地球温暖化』（NHK ビデオ教材、環境教育指導ビデオシリーズ）では温暖化によって海面が上昇した場合のシミュレーションなどを視聴した。

注⑧　VTR『追跡！台所ゴミどこが問題か？』（農山漁村文化協会）では、ゴミ処理場の課題、プラスチック素材を使った炎色反応実験、高知市のノートレイ運動などについて視聴した。

注⑨　VTR『家庭ゴミはこうして減らす』（NHK クローズアップ現代）では、ドイツのフライブルク市の取り組みの簡易包装、ごみの分別などについて視聴した。

ワークシート①

［問題１］次の新聞記事を読んで空欄に適する言葉を考えなさい。

『都市化によって都心の気温が高くなる［　　］現象について、環境省の調査検討委員会が９日、報告書を公表した。夏場に気温が 30 度を越える時間が、東京と名古屋市でこの 20 年間に倍増し、仙台市では３倍に増えたことが明らかになった。』（資料　朝日新聞 2001/8/10 より）

＊身近な環境問題に関心が持てるように新聞記事を利用したワークシートを作成。ヒートアイランド現象という言葉の意味を解説し、森林が果たす効果について次の記事を読ませた。

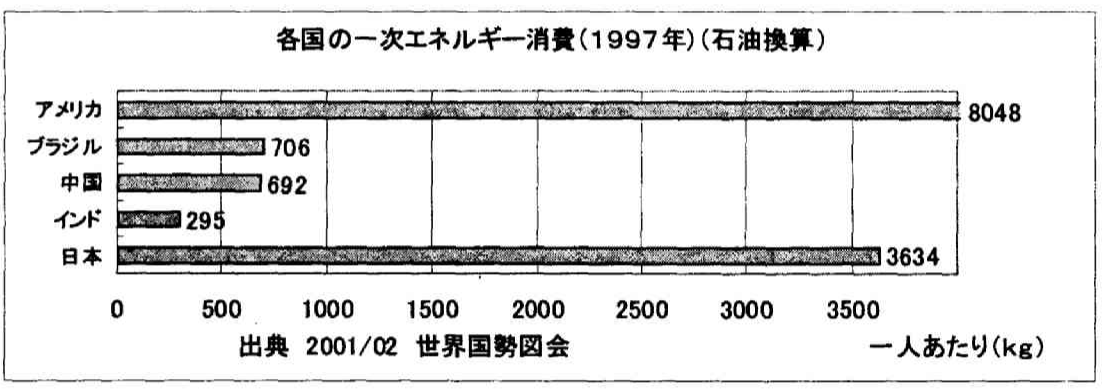
［問題２］次の記事を読んで、森林が果たす効果を考えながら「にじみだし現象」を図示しなさい。

『都心の大きな森が深夜に冷気を吹き出し、最大で 2.5 度、周囲を冷やしていることが、東京都立大学の三上岳彦教授（気候学）らの研究でわかった。風が吹く昼間は、風下 200 ㍍まで気温を下げていることも確かめられた。

東京都新宿区の新宿御苑の苑内外の 75 地点に自動温湿度計を置き、99 年と 00 年の８月に観測した。１年目に苑の周囲に蚊取り線香を置いたところ、風もないのに苑の外側に煙が向かうことがわかり、「にじみだし現象」に注目した。』（資料　朝日新聞 2001/7/24 より）

ワークシート②

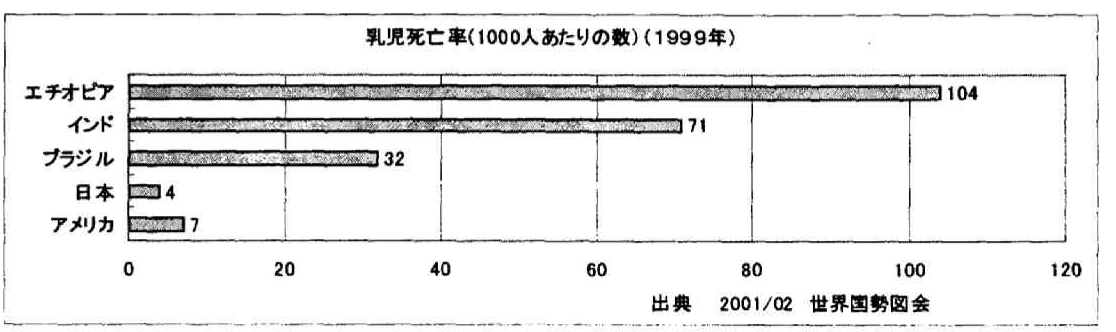
［問題１］次のグラフの中で、日本とインド及びブラジルの一人当たりのエネルギー消費を比較しなさい。




私たちは、インドの（　　）倍、

ブラジルの（　　）倍のエネルギーを使っていることになる。

［問題２］次のグラフを見て、日本とインドとの「乳児死亡率」を比較しなさい。



乳児死亡率ではインドは日本の（　　）倍であることがわかる。

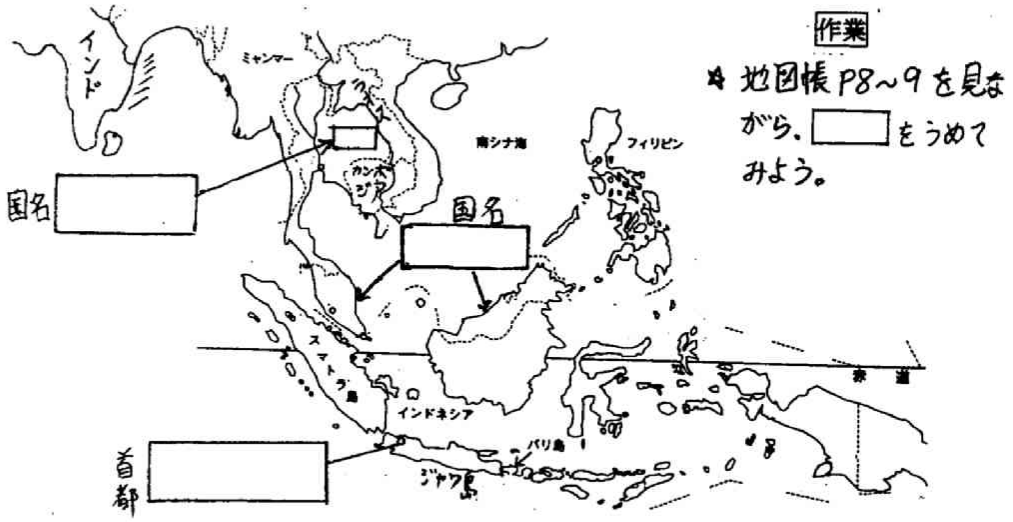
ワークシート③

［問題１］次の統計を見て、［　　］に当てはまる東南アジアの国を記入しなさい。

［日本の冷凍エビの輸入相手国］（日本貿易振興会『農林水産物の貿易』水産庁速報値並びに 2001 年のデータに関しては朝日新聞 2001 年 5 月 6 日の記事掲載の表と合わせて作成）

| | 1975 年 | 1980 年 | 1991 年 | 2001 年 |
|---|---|---|---|---|
| 第１位 | インド | インド | インドネシア | ［　　］ |
| 第２位 | インドネシア | インドネシア | ［　　］ | エクアドル |
| 第３位 | 中国 | 中国 | インド | インドネシア |
| 第４位 | ［　　］ | ［　　］ | 中国 | インド |

［作業］略地図の［　　］に当てはまる国名、首都名を地図帳で確認しながら、記入しなさい。




［問題２］次の記事を読んで、空欄に当てはまると思われる数値を選びなさい。

『ベンガル湾にゴダバリ川が注ぎ込むインド東海岸。日中 40 度まで気温が上がる広大な三角州にエビの養殖池がどんどんできている。４ヶ月の養殖で体調は約 20 ㌢。ブラックタイガー種で、黒いシマが浮き出ている。アジアで養殖されているエビの多くはこの種だ。

集荷場で氷詰めされ加工業者の元へ。頭を取りサイズごと分けて冷凍。ほぼ全量が輸出，地元での消費は［　　］％程度。規格外の小さなエビだ。』

（資料　朝日新聞 2001 年 5 月 6 日）

（ア）２　　（イ）２０　　（ウ）４０

＊授業では、生徒に音読させた後、三択問題を選ばせ挙手させた。直前に書いてある「ほぼ全量が輸出」に注目すると（ア）２、を選ぶことができる。

［問題３］次の記事を読んで、空欄に当てはまる言葉を連想して、記入しなさい。

『「もうけはコメとは比べものにならない」５年前から始めたアルラジフさん(45)は強気だ。「忙しくて遊ぶ暇などないが、家とクルマを新しくした」という。海の［　　］と呼ばれるエビは当たれば大もうけ。「エビ御殿」が建つがリスクも高い。しばしば大量死がおこ

るからだ。エビ大尽がある日すべてを失うことも珍しくない。』（資料　同新聞）

＊エビが貴重な外貨獲得のための輸出品であることに気が付いた生徒は、「宝石」とか「宝物」といった答えを出すことができた。「宝石の中でも最も高価なものは？」という問いかけに対して、多くの生徒が「ダイヤモンド」と答えることができた。

ワークシート④　『家庭ゴミはこうして減らす　－日独比較－』を見て

ＶＴＲを見ながら、次の空欄に語句を記入しよう。

（１）１週間のゴミの量を比較すると、１人あたり
日本では（　　）㎏、ドイツでは（　　）㎏である。

（２）そのうち、プラスチックなどの容器・包装類では、
日本では（　　）㎏、ドイツでは（　　）㎏である。

（３）ドイツの（　　）市の場合。地図帳の記号では、Ｐ 22、Ｆ・３－４である。位置を確認し、マークしておこう。

（４）ＶＴＲを見て、気が付いたこと、わかったことを記入しておこう。

---

---

---

＊生徒の感想

・ドイツの人達はリサイクルを心がけていることがすごいと思った。野菜が生で置いてあるのにびっくりした。
・日本のゴミは食べ物の容器が多い。
・ドイツのリサイクル法には驚いた。日本では簡単に捨ててしまう物もドイツでは何回も再利用されて人々の役に立っている、と思った。
・日本は使い捨ての社会になっていると思った。
・日本とドイツではゴミに対する考え方の違いを感じた。

**（２）本時（第５時）のねらい**

地球的規模で進行する環境問題について、「経済発展と環境保護」という２つの側面を持ち、そのジレンマから岐路に立つ発展途上国に視点をあてるとともに、先進国と発展途上国との関係（南北問題）の理解を深めさせる。

先進国日本との関わりを「衣食住」に焦点を当て、特に「食」のエビを媒体として間接的に熱帯林のマングローブ林伐採と関わっている構造に気付かせることをねらいとする。そのために本時では、エビ料理・種類、タイからの食材など生徒の身近な話題を教材化することで興味・関心を引くよう工夫する。現在、日本は「飽食の時代」と揶揄されるような大量生産、大量消費、大量廃棄の社会である。その非循環型社会を循環型社会に変換していく必要性を考察させ、日常生活にフィードバックできるようライフスタイルを問い直し、生徒の自己認識を深める。

また、学習の中では地図帳での地名の確認、グラフや統計の読み取り作業などを通して今年度の研究主題である「基礎・基本の習得」を図る。

**（３）学習指導案**

・実施クラス　　１年生　３５名

・単　元　名　　環境問題を考える　　１２時間扱い　（本時は第５時）

・使 用 教 材　　教科書及び地図帳

本時の展開

| | 学　習　項　目 | 学 習 活 動 （ 学 習 内 容 ） | 指 導 上 の 留 意 点 |
|---|---|---|---|
| 導入10分 | 前回の復習<br><br>本時の説明 | ・アマゾン川流域での熱帯林伐採の理由を確認する。<br>・アジアの熱帯林伐採について掛図を使って導入する。 | <br><br>・掛図に注目させる。 |
| 展開30分 | （1）エビ料理 | ・身近なエビ料理を連想させる。<br>「寿司、グラタン、エビチリ」などの意見が出る。 | ・エビの大きさにも言及する。 |
| | （2）エビの種類 | ・エビの種類を発表させる。<br>「伊勢エビ、ブラックタイガー、車エビ」などの発言。 | ・冷凍のブラックタイガーを見せる。 |
| | (3) 冷凍エビの産地とタイからの食材 | ・統計からタイを連想させる。<br>・エビ以外に焼き鳥、チューブ入り本わさび、ペットフードなどがあることに気付かせる。 | ・統計を掲示<br>・チューブ入り本わさび、ペットフードなどの実物を見せる。 |
| | (4)冷凍エビの産地の確認 | ・ワークシートの国名、首都を地図帳を活用して確認する。 作業 | ・プリントの配布<br>・地図帳を開ける |
| | (5)養殖の様子 | ・ワークシートの音読<br>・タイと日本の賃金格差を説明。 | ・生徒を指名 |
| まとめ10分 | タイでエビの養殖が広まった理由を考える。 | ・「もうけはコメとは比べものにならない」という言葉からエビの養殖が広まった理由を考える。<br>・授業を受けてわかったことをワークシートに記入。 | ・次回は熱帯林の伐採についての授業であることを予告。 |

**（４）評価の観点**

①「食」のエビを媒体として先進国日本と発展途上国タイとの関係（南北問題）が理解できたかどうか。

②地図帳での地名の確認、グラフや統計の読み取り作業などに取り組めたかどうか。

③「食」のエビを媒体として間接的に熱帯林のマングローブ林伐採と関わっている構造が理解できたかどうか。

**（5）分析と考察**

ア　授業研究について他の研究員の評価

・身近な話題で生徒が興味を持って、授業に臨んでいた。

・生徒が主体的に授業を受けていると感じた。

・実物教材の持つ力を改めて認識した。モノの持つ説得力だけでなく、そのモノを探し出して教室に持ち込む教師の意欲が生徒に伝わるのであろう。

・小道具（実物教材）を多数使用したことで、身近な問題と捉えることができたのではないか。

イ　定期考査出題とその結果

定期考査によって生徒の理解度がわかり、今回の指導案の評価ができる。以下、その内容の一部を記す。

①現在、日本は東南アジアからの最大のエビ輸入国であるが、そのエビはほとんどが養殖である。何という種類のエビか。

②東南アジアの海岸線に広がる熱帯林は何というか。

③また、その熱帯林はどのように利用されていたか。その利用方法を3つ答えなさい。

④タイやフィリピンなどで、その熱帯林が伐採されている理由は何か。

＊①のブラックタイガー、②のマングローブはほぼ全員が正解できた。③の薪などの燃料として利用されたり、炭として輸出されたり、家屋の建築材として利用されていることも答えることができた。が、最も本質的で重要な④に関してはアマゾン川流域の焼畑と混同している生徒が約半数いた。このことは教材の組み立て、構成などを今後、十分に工夫することの必要性を痛感した。

ウ　考察

研究主題にある「問題意識を深め、自ら課題を追究し、解決・行動できる資質を育成する」ことを目標に指導計画を立案した。それはいかにして主体的・意欲的に取り組む姿勢を育むかという問題と言えよう。そのためには、まず第一に意外性を持たせること、さらに「身近な話題」により生徒の興味・関心をひきつけるが大切であると考えた。

そこで実際に、タイと日本との密接なつながりを理解させるために「ブラックタイガー」や「チューブ入り本わさび」、「ペットフード」など実物を教室に持ち込んだ。言葉では知っていてもブラックタイガーを見るのは初めてという生徒がいた。エビという「身近な話題」であり、それらの多くが日本向けに養殖されているという事実を知って「意外性」を感じることができたようであった。また、できるだけ講義形式を避け発問を繰り返し行い、生徒に考えさせることを心がけた。そのようなことが「生徒が主であった授業」という他の研究員からの評価にも表れていたかと思う。

次に、地図帳での地名の確認の際は机間指導を行ったり、難解と思われる漢字についてはルビを振ったり、意味を確認するなどして「基礎・基本の習得」については、きめ細かな指導を心掛けた。

また、今回の学習を通じて、知識を羅列的に学習させるだけではなく、その背景にある「南北問題」や日本の「大量生産、大量消費、大量廃棄」の社会構造に目を向けさせ、実生活の中でも諸問題の解決を追究し続ける姿勢を育成することが必要と考えた。

最後に地理的な見方や考え方を習得させるために、具体的なイメージを持ち理解を深める手段としての写真、VTR などの視聴覚教材は重要である。特に、現代的な課題である環境問題を扱う場合、できるだけ新しいタイムリーな情報が効果的である。VTR を視聴させて生徒の興味・関心をより一層深めることができた。例えば、ゴミ問題で日本とドイツとの取り組みの違いをVTR で視聴させたが、日常的に過剰包装社会を当然のこととして受け入れていた生徒達が、積極的にリサイクル活動をするフライブルク市民の様子を見て、今後、自分たちも何か考えなければいけないのでは、といった意見がワークシートに見られた。

環境問題という地球的な課題を学習して、ある生徒が「社会科は一つの考え方から色々な考えが生まれて、それが一つ一つわかってくるとおもしろい。」という感想をノートに記していた。その生徒にとって「Think　Globally、Act　Locally」の標語にあるように地球規模の視点で考え、具体的に何が行動できるかを考察していく姿勢を習得できたのではないだろうか。今後はいかに「Act　Locally」ができるかどうか、といった点が課題である。そのためには、より一層、生徒が「自ら課題を追究し、解決・行動できる資質」を育成できる授業の工夫が必要である。

(6) まとめ

今回は、具体例として東南アジアの「熱帯林破壊」を中心に取り上げた。「熱帯林破壊」を切り口に、さまざまな事柄を学習できるように工夫したことで、深く発展的な授業づくりができたと思う。

森林の役割を導入に自然環境の仕組みという知識的な土台づくりができ、身近にあるエビやペットフードの話から、東南アジアの産業・貿易の発展がなぜ森林破壊に結びつくのかを生徒に考察させ、我々の日常が国際社会と深く結びついていることを実感させた上で、「南北問題」にも言及したり、大量消費社会と日常生活のあり方までを生徒に考えさせる授業づくりができた。冷凍エビなど、授業に関係する実物を教室に持ち込み、生徒の興味・関心を引きだし、その効果の大きさを実感できたのも大きな収穫であった。

また、授業のたびに地図・統計を使い、読図力などを育成するという知識以外の基礎・基本の習得もはかったり、班ごとに生徒が協議し発表する機会を設定し、主体的に考え解決しようとする態度や資質の伸長をねらう、授業の工夫も行うこともできた。

こうした点で、研究主題にある、生徒の資質を育成するに有効な工夫ができたと考えている。

課題としては次のことが考えられる。生活に身近なものを教材に取入れたこともあり、「環境問題」解決に向け、個人のライフスタイルの改善について生徒に考察させられたことは、成果であった思う。だが、実際に「環境問題」の根底にある「大量生産・消費」や「南北格差」などという問題は、先進諸国の経済や価値観のあり方、あるいは社会の仕組みそのものに起因している面が大きいとも考えられる。したがって、問題の解決のために、個人一人一人が取り組むべき環境保全のあり方に加え、個人が属する社会全体に課せられる環境保全のあり方（国や自治体による環境保護政策と、それに個人がにどのように関わって行けばよいのかということ)、「環境破壊」や「環境保護」に関わる企業のあり方などについても、我々は、より問題を整理し教材化する必要があったように思う。個人が背負おうべき課題と、政府・自治体に課せられる環境保護政策、国際協調の中で実現すべき環境保全などについて、生徒がバランスよく学習できるような指導の研究が課題であると考える。

また、生徒の実態や授業の進度に応じて、調べ学習やディベートを取り入れることも考えられる。生徒の主体性を伸ばす指導法として、効果的と思われるので付記しておく。

【公民分科会】

**研究主題**

現代社会の諸課題を理解し、自ら価値判断し、自らの考えを表現できる能力をはぐくむ指導の工夫

## Ⅰ　研究主題設定の理由と研究の経過

### 1　研究主題設定の理由

現在の生徒の生活態度のなかに、「非常に軽い相対主義」とでも言えるものを感じる。ある問題について自分の意見をもち、他者の意見もしっかりと受けとめ、それを自分の意見にさらにフィードバックさせるという姿勢は、大切な資質である。しかし、多くの生徒は「その人がそう思うんだから、それでいいんじゃないの」という周囲への無関心な対応にとどまってしまい、深い思考や豊かな想像力を働かせようとしないのである。それは「無責任な個人主義」とも言えるかもしれない。現代社会での希薄な人間関係も、こうした態度に影響を与えていると思われる。ＩＴに代表される科学技術の発展は、反面で、他者との十分な精神的な関わりの欠如、という問題を生み出したと言うことができる。

そのため、このような問題を克服する主題を設定してみた。つまり、社会の諸問題について理解し、その上で自分なりの責任ある意見をもち、他の生徒の意見も尊重しながら、さらに自分の考えを表現できる生徒を育てる。そうした授業を目標とした。したがって、教師は賛否両論を公平に伝え、理解した内容のひとつひとつから生徒が価値判断を行い、さらに表現能力を高めることを重点とする授業の工夫をした。

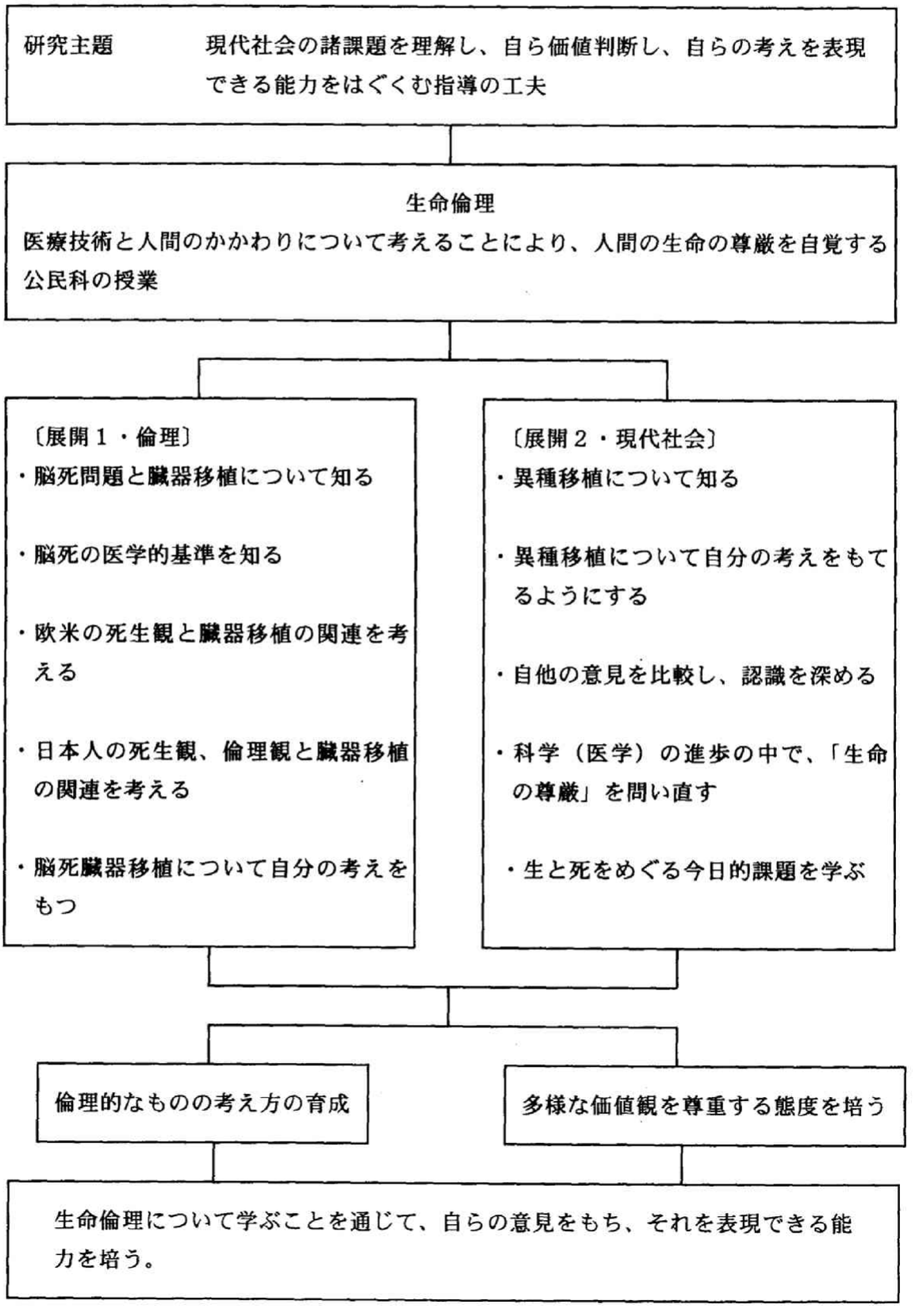
### 2　研究の経過

本部会では、主題の主旨にそって「生命倫理」を扱うこととし研究を行った。現代の社会では、ほんのささいな理由から生命が奪われる事件が頻発している。青年期の場合では、自己の欲求が満たされなければすぐに「キレ」てしまい、他者の生命を奪う一方で自らの生を傷つけるケースが目立っている。生命の尊厳を軽視するような状況の背景には、生徒が生と死についての学習を十分に行っていないことも考えられるのではないだろうか。

そこで、「倫理」と「現代社会」の授業において、「生命倫理」について考察する授業を行うことにした。まず、自分自身のテーマとして生徒が考えやすく、意見も出しやすいと思われる「死」のありかたについて様々な視点から考えさせることにし、最終的に生命の尊厳を感じさせようという方向性をもたせることにした。安楽死・尊厳死、告知と終末期医療、脳死と臓器移植、植物状態などの中から、誰でもが直面する可能性のあるケースを選び、死と生の問題を考える。できる限り生徒に主体的に意見を出させたいので、個別にワークシートを準備し、それをもとに様々な意見があることを紹介して、他者の立場を理解し自分の意見形成に再度反映させることを試みた。また、最先端の医療技術である異種移植を取り上げ、人間への臓器移植目的で豚を飼育することをめぐって肯定の立場、否定の立場からそれぞれ討論を行わせた。立場を指定することで、様々な視点から幅広く自分の意見をもてるようにしてみた。最終的に

は、人間へのクローン技術の応用など科学（医学）の進歩が、単純に人間の倫理性と合致しないことに気づかせたいと考えた。

### 3　研究についての構造図



## II　展開

### 展開１　倫理の授業「脳死と臓器移植」

#### 1　単元設定の理由

本単元では、倫理の学習として生徒が関心を持ちやすい題材を選ぶこととした。

そこで、哲学者の思想を概観したり、歴史的に哲学の流れをみるという学習ではなく、現代社会において争点となっていることで、生徒それぞれが価値判断できるものを題材とすることとした。

脳死と臓器移植の問題は、医療の側面や、倫理、宗教、文化など様々な観点から論じることができる。そして、最終的には、それぞれの人が自分で価値判断し、その態度を決めることのできる事柄である。

脳死は「新しい死の形」という点で、生徒の知的好奇心を喚起するだけでなく、自らの生の在り方を見つめ直す契機となると考えた。

単元の展開の中で、欧米の哲学や日本人の死生観にも触れ、生徒の興味の幅が広がることを期待した。そして、生徒それぞれが自分の価値判断を問われることで、題材に主体的に関われるのではないかと考えた。

また、脳死と臓器移植を、生命倫理学の一分野ととらえれば、現代において価値判断を問われている同質の問題として、クローン人間や遺伝子治療、安楽死等の問題があることを理解させることができる。

このように様々な広がりをみせる「脳死と臓器移植」の問題は、倫理の学習の良い題材になると考えた。また、倫理の学習全体の導入でもある本単元においてとりあげることで、今後の倫理の学習の動機付けとしたい。

#### 2　単元の指導計画

(1)脳死問題の発生と臓器移植（１時間）
(2)医療的側面からみた脳死（１時間）
(3)欧米の思想と臓器移植（１時間）
(4)日本人の死生観、倫理観と臓器移植（１時間）本時

#### 3　本時の学習

(1)本時のねらい

・臓器移植の在り方についてについて、日本人の死生観や倫理観がどういう影響を与えているか理解する。
・臓器移植法が、日本人の死生観に配慮していることを理解する。
・脳死と臓器移植についての自分自身の考えをまとめる。

(2)展開

| | 学習項目 | 学　習　活　動 | 指導上の留意点 |
|---|---|---|---|
| 導入10分 | 前時の復習 | ・前時のワークシート①（脳死判定から臓器移植までの流れ、欧米の哲学と臓器移植）を受け取り、ノートにはる。<br>・前時の復習として、欧米の哲学と臓器移植について学習内容を再確認する。 | |
| 展開25分 | 日本人の死生観<br><br>日本人の倫理観<br><br>臓器移植法 | ・「死装束」「お盆」「イタコ」等の実例や自分自身の経験をもとに、日本で伝統的に見られる死生観について理解する。<br>・加藤尚武氏（生命倫理学）の理論を紹介し、日本人は「責務を超えた善行」より「相互性の倫理」を行動原理にする傾向が、欧米人より強いことを理解する。<br>・「責務を超えた善行」について、例えば新大久保駅での人命救出や電車内で座席を譲れるか等の身近な問題から理解する。<br>・「相互性の倫理」について、「情けは人のためならず」等のことわざから理解する。<br>・臓器移植法が日本人の死生観に配慮して、本人の同意に加えて、家族の承諾も必要としていることを知る。（諸外国にはない規定） | ・板書をノートに写させるが、ノートのない生徒には教員が用意した提出用紙に記入させる<br><br>・ワークシート①により脳死判定と臓器移植の流れを確認する。 |
| まとめ15分 | 脳死と臓器移植 | ・脳死と臓器移植について、今までの授業や資料集を参考にしながら、自分自身の考えをまとめる。<br>・まとめたものを、ワークシート②（作文用紙）に記入する。 | ・机間指導し、全員が記入し提出するようにはたらきかける。 |

(3)評価の観点

・日本人の伝統的な死生観や倫理観を自分自身の経験や感性に照らして、理解することができたか。

・脳死と臓器移植について、正確な事実に基づきながら、様々な観点を考慮し、自分自身の判断をもつことができたか。

### (4)分析と考察

①題材としての「脳死と臓器移植」

大多数の生徒の連想する死とは、いわゆる心臓死である。そこに、脳死という新しい死の概念が提示されたことに、生徒は知的好奇心を示した。

しかし、授業では、医学的な脳死の条件の説明に終始してしまった。効果的に指導をするには、例えばドナーカードを保持して、交通事故死をした１７歳の女性（脳死判定の条件が揃わずに第２回で判定を中止）の例などをあげ、誰にでも起こりうる可能性のある、より身近な問題として提示した方がよかったと考えられる。

②生徒への質問と回答

生徒への質問（表１）の回答では、「脳死」を認めるとしたものが６割弱、「臓器移植」を認めるとしたものが７割強であった。(「認める」と「やや認める」を合わせた数)

矛盾しているようにもとれるが、従来の「心臓死」の概念を持っている生徒にとって「体が温かい」状態を死と認めるには抵抗感があり、「臓器が全て停止したときが完全な死」「体は死んでいない」とする意見が見られた。それに対し、「臓器移植」を認めるのは、人助けになる良いことという思いがあるのだろう。「自分は提供してもいい」という意見が割合に多かった。おもしろいのは、「死んでいても臓器をとられるとちょっと寂しい」「どうせ燃やされるのだけれども何か嫌だ、言葉では説明できない」という意見があったことである。死を完全な消滅と考えることには何か割り切れないものを感じているのだろう。

「臓器移植に同意した家族の脳死判定と臓器移植を認める」に６割強（「認める」と「やや認める」を合わせた数）が賛成した。本人の意思の尊重ということでもあろうが、家族のことでも「その人がそう思うのならそれでいい」という、自分自身の価値判断をすることなく単に本人の意志を尊重するというだけの感覚があるのなら少々気がかりである。生徒の文章の中にも、「その人の考えで判断すればいい」というのが散見された。

ただし質問項目にも検討を加える余地があり、生徒の考えをより正確に知るための研究が必要である。

（表１）生徒への質問と回答

| 質　問 | 認める | やや認める | やや認めない | 認めない | 無回答 |
|---|---|---|---|---|---|
| ①脳死を人の死と認めますか | １８人 | ２７人 | １５人 | １５人 | ０人 |
| ②脳死者からの臓器移植を認めますか | ２３人 | ３３人 | １６人 | ４人 | ０人 |
| ③かりに臓器移植に同意して家族が脳死状態となったら、脳死判定と臓器移植を認めますか。 | ２３人 | ２４人 | ２１人 | ６人 | ２人 |

＊総数　７６人

③死生観と臓器移植

学習の導入として、脳死、臓器移植と思想、哲学の関連について取りあげた。欧米人と日本人の死生観を取りあげたが、民族によって死後の世界のとらえ方に違いがあることに生徒は興味を示していた。それに対し、デカルト（物心二元論）やデューイ（プラグマティズム）の思想を、脳死や臓器移植と関連させながら紹介したが、生徒の反応はあまり芳しくなっかた。死生観から、儒教、仏教やキリスト教へと掘り下げるほうが、生徒の興味・関心をひいたかもしれない。

④ワークシートの活用

学習意欲の低調な生徒は、題材のおもしろさだけでは、学習に集中できないことがある。また、少し難しい課題を出すとあきらめてしまったり、授業のポイントがつかめないことで意欲が低下してしまうことがある。そこで、教科書や資料集の重要語句の書き取りを穴埋め問題で実施した。簡単にでき、ポイントをつかめるので、基礎的な知識の習得に有効であった。

ワークシート

・心拍の停止、呼吸の停止、そして、瞳孔の停止（反射の停止）のいわゆる「死の三兆候」（心臓死）

↓ ＊資料集にある以上のような文章を見ながら穴埋めをする

・（　　）、（　　）、そして、（　　）（反射の停止）のいわゆる「死の三兆候」（　　）

⑤判断する力、表現する力

脳死と臓器移植については、さまざまな考えや賛否両論がある。そこで、授業のまとめとして、最終的に生徒それぞれが自分の判断で考えを持ち、自分の考えを論理的にまとめ、表現できることをねらった。自分なりの判断を持つためには、基礎的な知識の理解が必要である。授業では、賛否両論や異なる考えを公平に伝えた。また、なぜそのような判断になるのか、順を追って解説することで、論理的な思考の仕方が身に付くように配慮した。

授業では、文章によりそれぞれの考え方を表現させた。賛否それぞれの立場から自分の考えを表現できていたものが多かった。

現代の社会の風潮として、社会問題への無関心があげられる。社会問題に主体的に関わったり、問題意識を持つことは、社会人の資質として重要である。授業の中でも、知識を得ることに加えて、判断力や表現力も学力と捉え、その育成をしていかなければならない。

授業では生徒の実態や時間的な制限から、自分の考えを文章でまとめることにして、それを教員が次の授業で紹介するのにとどめた。

しかし、真剣な議論をすることの少ない日頃の生徒の様子を見ると、ディベートにより自分の考えを深めたり、ロールプレイにより相手の立場に立ってものを考える経験も有効と考えられる。生徒の実態に合わせて、このような学習も考えてみたい。

## 展開２　現代社会の授業　「医療技術の進歩と生命倫理」

### １　単元設定の理由

これまで「現代社会」等の授業で「脳死と臓器移植」など「生命倫理」に関わるテーマをを取り上げ、現代社会に生きる「人間としてのあり方生き方」についての自覚を問うてきた。その中で、例えば資料として配布した「ドナーカード」を手にした生徒の多くは、臓器移植のために自分の臓器を役立てたいと答えるが、「親はどう思うだろうか」など自分だけでは判断できないと考える者も少なからず現れた。それは「私のこの身体・生命は私だけのものなのか」という疑問に直面したためである。この疑問にしっかりと向き合わせることで、今日問われているさまざまな「倫理」問題への理解を深めさせたいと考えた。

広辞苑（第５版・岩波書店）によれば「生命倫理（バイオエシックス）」とは、「古来、患者の生命をゆだねられる医師に求められてきた医の倫理に、人工授精・胎児診断など生殖への介入、臓器移植とそれに関わる脳死問題など、医療技術の発達により生じた新しい局面を加えた（後略）」概念である。そこで授業では、いわゆる「脳死判定基準」などのガイドラインが定まっていない、できるだけ最先端の話題を取り上げ、科学と生命の関わりを考察させる。その際、「倫理」を永遠不変のものと見るのではなく、社会的合意の積み上げによる発展的なものととらえさせたい。また、その「積み上げ」の過程では、インフォームド・コンセントやクオリティー・オブ・ライフなどが重視されつつある今日の流れをふまえて、①すべての人を「生命の主権者」としてとらえること、②各自の価値判断やライフスタイルが最大限尊重されることが不可欠であることを理解させたいと考える。

### ２　指導計画

上記テーマを【第１時】「異種移植」の是非をめぐって、
【第２時】移植医療から再生医療へ、
【第３次】「安楽死」と「尊厳死」、
【第４時】人間の生命の尊厳と「生命倫理」、という４時間で単元構成した。

本単元の導入となる【第１時（研究授業）】は、はじめにＶＴＲの視聴によって最新の医療技術（「異種移植」）の一端に触れさせた上で、班別討論の過程で各自に価値判断を行わせ、同時に自他の意見を比較させることで、本テーマ学習の「動機付け」となるようにした。【第２時】では、「移植医療」において「ヒト以外の動物」がドナーとして注目されたり（第１時の「異種移植」）、また「再生医療」が希求されている現状を学ぶことで、「移植医療」の難しさの背景を考えさせた。その上で【第３時】では、「安楽死」と「尊厳死」をめぐる内外の事例を取り上げ、「人間の生命の尊厳」という概念を理解させた。さらに【第４時】では、最近報道されたその他の医療技術の話題（※）に触れ、それらの是非をめぐる対話（生徒←→教員）を通して、価値判断基準としての「生命倫理」とは何かの考察を深めた。

※「６０才の日本人女性が体外受精で妊娠・出産」朝日新聞２００１年８月７日
「死亡胎児の細胞を臓器再生の研究に利用」朝日新聞２００１年８月５日

## 3　研究授業

### （1）本時のねらい

医療技術の進歩をめぐる最近の話題の中から「異種移植」を取り上げ、新しい技術が私たちの社会に何を問うているかを考えさせる。特に、この新しい医療技術の安全性は「科学的」に判断することができても、人間に臓器を移植するために豚を飼育することの是非はどのような基準で判断することができるのかという点について着目させ、現代社会が直面する「生命倫理」とは何かの一端を理解させる。

また、是非をめぐる討論を通じて、自らの考えを表現すること、他者の考えに触れて自らの認識を問い直す姿勢を身につけさせる。

### （2）本時の展開

| | 学習項目 | 学習活動 | 指導上の留意点 |
|---|---|---|---|
| 導入10分 | 「異種移植」とよばれる医療技術 | ①ＶＴＲ『生命生産工場』（平成１３年８月ＮＨＫ放映）の一部を視聴。「異種移植と呼ばれる医療技術の一端を理解する。（およそ７分間） | ①視聴前の解説は敢えて行わず、映像から受けた率直な印象を心にとどめさせる。 |
| 展開30分 | 「異種移植」の是非をめぐる討論 | ②「移植目的の無菌豚飼育」をどのように感じたかをワークシートに記入する。 作業１<br><br>③指名された２～３名が感想を発表する。（５分）<br>※予想される生徒の反応<br>「人間が豚を道具のように利用するようで嫌だ」など<br><br>④「人間に臓器を移植するために豚を飼育することの是非」というテーマで班別討論をする。その際、偶数班は肯定する立場に、奇数班は否定する立場にたってその理由をまとめる。（１０分） 作業２<br><br>⑤偶数班と奇数班の代表者が班でまとめた理由を発表する。→相互に反論する。その間、各自はワークシートに論点を記録する。（１０分） 作業３ | ②挙手により、賛否のみをクラス全体で確認する。<br><br>③次の討論につながる発言に注目させる。<br><br>④机間指導しながら討論を促す。<br>「無菌豚は他の豚より幸せ」というＶＴＲ中の研究者の発言などを具体的に取り上げていく。<br><br>⑤発表をよく聞き、その要点をまとめるよう指示する。 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| | 是非の判断基準について | ⑥討論をふまえ、「移植目的の無菌豚飼育」の是非はどのような基準で判断されうるかを考え、ワークシートに記入する。（５分）<br>作業４ | |
| まとめ10 | なぜ「異種移植」という技術が必要とされるのか<br><br>最近の医療技術の進歩に関する報道の事例から、現代社会に生きる私たちに何が問われているかを理解する。 | ⑦　臓器移植におけるドナー不足が背景にあることを理解する。<br>　移植医療の限界から再生医療が希求されていることを学ぶ。<br>NOTE<br>⑧　配布した新聞報道の資料を読む。<br>「６０才女性の卵子提供治療による出産」<br>「死亡胎児の細胞から臓器再生」<br>　→技術の利用にあたっての一定の基準を模索していることを確認。<br>生命倫理＝生命の尊厳の尊重＋社会の合意形成 であることを理解する。 | ⑥脳死患者からの臓器移植の事例が移植法施行後７例しかないことを資料で紹介。（１３年８月１６日現在）<br><br>⑦資料は「見出し」に注目させ、内容は簡潔に解説する。<br><br>⑧まとめを板書。私たちがまさに「合意形成」の当事者であることを確認する。 |

**（３）評価の観点**

①「異種移植」の是非について、自分自身の考えをまとめることができたか。

②討論を通じて自らの考えを表現し、また、他者の考えに触れて自らの認識を問い直す姿勢をもつことができたか。

③現代社会が直面する「生命倫理」をめぐる問題の複雑さを理解できたか。

④自らが「社会の合意形成」の当事者であることを自覚できたか。

**（４）分析と考察**

①　これまでも授業で「臓器移植」・「遺伝子診断」・「出生前検診」・「デザイナーチャイルド」などを題材に本テーマを取り上げ、技術利用を「肯定する意見」と「否定する意見」を紹介した上で、その是非をめぐる討論や作文などを行ってきた。そこでは、討論が進むうちに、結局は「その人次第」と結論づける生徒が増え、「私はイヤだけれども、べつにその人が良ければよい」といった「相対主義」から抜け出すことがなかなかできなかった。今回題材に「異種移植」を取り上げることで、「人間による他の動物の生命利用」の是非をめぐって、「ブタがよければよい」といった思考がナンセンスになることで、「生命倫理」についての考察がこれまで以上に深まることを期待した。

②　導入のＶＴＲ資料で生徒の関心を最もひいたのは、母豚から帝王切開で取りあげられた子豚を無菌状態にするために、ヨードチンキ液の中に頭からくぐらせた場面である。ショ

ッキングな映像は生徒の関心をひくという点で導入資料として効果的だが、今回も「かわいそう」など、情緒的な反応に多く結びついてしまった。しかし、「新聞記事は読む気がしない」「読めない」という生徒が多く、活字資料ではなかなか有効に活用できないのが現実であり、映像資料の持つ力は大きい。ただ、こうした映像資料であっても、集中して視聴できる時間には限りがあり、適切な使用が不可欠である。

③ ＶＴＲの視聴後、自分の感想をワークシートに記入させ（作業１）たが、事前に設定した設問から、ＶＴＲ中の飼育担当科学者の「無菌室で飼育されるブタは他の養殖ブタより幸せです」という言葉をどのように思うかという設問に急遽変更した。事前に設定した設問に対する生徒の反応から、「ひどい」「かわいそう」といった漠然とした感想しか出てこないと考えたための変更であった。しかし結果としては、生徒自身から「この言葉に関心を寄せた」という感想を引き出したほうが、その後の討論もより活性化したと思われる。与えられた設問に取り組むだけでなく、問題点を見いだし、課題を設定できる力の育成が今後の課題である。

④ 作業２において、班毎に肯定・否定の立場を割り当てたが、これは自分の意見はなかなか口に出して表現できないが、立場を指定すると比較的発言が増えるためである。自他の意見を比較させることで、自分の意見を一度相対化させることがねらいだが、本時では十分な討論の時間が確保でなかった。そのために、作業３も不十分となった。

⑤ 作業４において、否定意見として「利用される動物の意思に反するから」という意見が出された。この時授業者は、人間の立場のみの是非論を超える「大事な発想」である趣旨の取り上げ方をした。しかし、この点については、人間は「肉食や皮革の利用などで動物の命をいただいている」ことをしっかりと押さえることが必要であった。食肉のために飼育することと、ドナーとして飼育することの根本的な違いをしっかり見つめさせる場面となったはずである。また、「生き物を殺すこと（命を奪うこと）の意味」、動物は「他の生き物の命の上」にその命を成り立たせていることなどへの再認識が「生命倫理」の学習の際には不可欠であることに気づかされた。

**ワークシートの「設問」**

**作業１** **価値判断**

ＶＴＲから、「移植目的の無菌豚飼育」をどのように感じたか。率直な感想を書きなさい

**作業２** **自他の意見の比較**

「無菌ブタは普通のブタより幸せか」というテーマで班別討論をする。その際、偶数班は肯定する立場に、奇数班は否定する立場にたってその理由をまとめなさい。

**作業３** **他者の立場理解**

対立意見の班の主張をまとめなさい。

**作業４** **自分の意見形成**

討論をふまえ、「移植目的の無菌豚飼育」の是非を考えるとき、科学的な安全性以外にどのような基準で判断することが必要だと思いますか。

## Ⅲ　まとめ

新学習指導要領で重視している「課題を設定し追究する学習」について、「生命倫理」という課題を設定して、医療技術の進歩と生命倫理観に迫ることを目標とした。
「学習の過程で考えたことや学習の成果を適切に表現」させるために自己の課題とつなげる姿勢や自らの生き方を主体的に決定できる能力を育成する学習内容と方法を開発し、さらに、自分の考えを論理的にまとめ、表現できることをねらった。

「生きる主体としての自己形成」を図るという点を重点化し、生徒自らが主体的に探求し自己形成を図るという観点が新学習指導要領では顕著に重視されている。
自己の課題とつなげたり、主体的に考察させるために、課題（問題点）を見つけられない生徒にどう対応していくか。議論を重ねた点である。
「問題場面」を用意する方法を採り、生徒が問題や課題を感じられる場面を、時間をかけて用意する必要があった。

① 初期段階・・・生徒自らのこれまでの生活体験から課題のイメージを引き出し、それに基づいた思考を導く。
② 教員側からの問題場面提起・・・事実・事象との対決を通じて、自らのイメージを修正・発展することができるように導く。
③ 課題のまとめ・・・最終的なまとめを教員が一方的におしつけることなく、課題の是非をめぐる討論を通じて、自らのイメージと言葉によって結果をまとめ、他者の考えに触れて自らの認識を問い直す姿勢を身につけさせる。

上記の構成を念頭に、生徒の主体的な学習を促す指導計画を作成し、研究授業・検証授業を実施した。

脳死は人の死かどうかが臓器移植とのからみで社会問題になり、それを契機に「死」が正面から語られるようになってきた。いま、「死」の意味が大きく変わろうとしている。
人間らしい「生」とは何か、「死」とは何かを問い直し、尊厳死、臓器移植、さらには異種移植の是非について生徒自らの考えを引き出すことができた。
また、これらの問題について、生命の価値、生と死といった問題として自分自身と引きつけて考えさせることを常に念頭に置いた。そして、人間の生命を自然の生態系の中で捉えさせ、人間以外の生命と人間との相互依存関係を気づかせ、全ての生命体との調和的な共存関係の重要さの理解を促進させ、諸課題の本質や問題点を捉え、課題の追究を通して、望ましい解決の在り方について様々な観点から考察させることに一定の成果を得ることができた。
研究授業においては課題プリント（ワークシート）を活用した。授業はこのワークシートの発表を中心に進められた。生徒の思考を進める際、基礎的な知識の習得に有効であった。
さらに、アンケート調査を実施し、さまざまな考えや賛否両論があることを提示した。
学び方の習得を図るという観点からも「統計などの資料の見方やその意味」「追究した結果のま

とめ方」について一定の成果が得られた。

しかし、生徒自らの考えを引き出すために、自分の考えを文章でまとめ、それを次回の授業で発表することに止まった点が研究授業の課題として残された。

検証授業はこの点を踏まえ、課題の是非を班別に議論する時間を設定した。機械的に、肯定する立場の班と否定する立場の班に割り振られた生徒は、生徒自身が情報を分析し成果を発表する等、関心、意欲、態度の評価を実施することにより、自分自身、他者の良さを多面的に理解させる実践例となった。

現代の特質と倫理的課題について、自らの生き方につながるような学び方を通して思想を深め、生きる主体としての豊かな自己形成を図れるようにすることを重視した授業研究を行った。

思想史を離れてテーマ的に現代の諸課題を考えさせ、必要があれば、思想家の思想を援用することにした。

課題追究学習は生徒に任せきりにするのではなく、課題設定から始まるそれぞれの過程つまり① 課題の発見 ② 資料の収集とその活用 ③ 課題の追究 ④ 課題のまとめと発展の各段階で生徒の問題意識を高め、生徒自らの課題追究の見通しを持たせ、主体的な学習を進めることができるような適切な指導を必要としている。

そのためには生徒の発想力、洞察力、思考力、表現力など、育成したい生徒の能力は多岐にわたる。生徒が今まで持っていた「見方や考え方」では捉えることはできないものに出会ったとき、それは分かりたい解決したい課題となった。そこで、課題解決のために様々な情報、資料あるいは他者の考え方を用いて課題を追究し、解決することに役立つ理論や考え方を用いて考え方を自ずと取り入れ、結果として視点を広げ、深めることができた。

評価に際して、「学習の過程で考えたことや学習の成果を適切に表現させる」ことを重視した。

どのような根拠でどんな結論を導き出したのか。学習によって得られた結論とその結論を導き出した課程を具体的、論理的に第三者にわかりやすく説明しあるいは文章に示す課程で、適切に表現させることによって明らかになる。

さらに生徒の意欲・関心・態度などの学習のプロセスを重視する多面的な評価方法、生徒の意欲と能力を高める評価のあり方について継続して研究することが課題である。

平成１３年度教育研究員研究報告書

東京都教育委員会印刷物登録
平成１３年度　第４１号

平成１４年１月２３日

編集・発行　東京都教職員研修センター
所在地　東京都目黒区目黒１－１－１４
電話番号　０３－５４３４－１９７６

印刷会社名　株式会社　ドゥ・アーバン